

田久保周譽著

堀船師土史

附堀船町居住者名簿



堀船師

田久保周譽著

堀船郷土史

ほりふな發行所刊行



著 者 の 近 影

郷土の土指

大庭

宇陀工場階のたれゆき

五、傳説と口碑篇

1. せえの(歳納)神の故事……………	(40)
2. 庚申待ち……………	(41)
3. 参拜講……………	(42)
1. 石神井川とその傳説……………	(43)
2. 齋藤學校……………	(44)
3. 女体權現……………	(45)
4. 淺間淵……………	(46)
5. 往昔の豊石橋一帯……………	(47)
6. 梶原渡し……………	(48)
7. 彰義隊余聞……………	(48)
8. 埋木……………	(49)
9. 王子電車の開通……………	(50)
10. 郷土の長壽翁……………	(51)
11. 水害雜景……………	(51)
12. 雷神と落雷……………	(52)

六、郷土の生んだ文化

1. 寫眞植字機の發明……………	(54)
2. 完全燃燒機の發明……………	(55)

郷土娯船の地域圖……………	(57)
娯船町一、二丁目居住者名簿……………	(58)

竹原式花風土記 (六)
 郷土の生んだ文化
 娯船町一、二丁目居住者名簿
 郷土娯船の地域圖
 寫眞植字機の發明
 完全燃燒機の發明

堀船郷土史の發行に至るまで

新聞を發行している關係からか、私を物知りと誤信せられるものと見え、郷土の歴史に関する事や地名等について尋ねられる事が一再ではなかつたが、お恥しい話ながら私は全く之等についての知識を持たない。ソコで知らないと答える外に道がない。

その土地を永住の地と定めてみれば、歴史や傳承を知り度いという事は何人も望む處であろう事はむしろ當然と云はねばならぬ。

福性寺の住職田久保周譽師は西藏語の研究、梵語による佛教の原典を研究せられ、斯學界に於ける權威であり、かつては「批判悉曇學」二冊の大著を世におくり、その後の永年に亘る研究もすでに大成して近く脱稿を見るに至らんとする碩學の人であるが、兩三年前より地元の有志の青年諸君を督励して郷土研究にも力をそゝがれる事を知り、郷土史を新聞に發表する事について御相談をおかけした處が、快諾を得て以來毎号「ほりふな」紙上に連載して好評を博した次第である。

之れが町内の各層に大なる反響をよび、小學校では社會科の教材として採用さるゝと云う向もあり一冊の書籍として發行される事を要望される聲が高まつて來た。一面又、田久保師はその後も東奔西

走資材をあまり、研究を進め更らに増補の必要を感じらるゝに至つた。

私も又完全なる郷土史を世に送る事の重大なる意義を痛感して刊行の希望止み難きものがあつた。而し此の事たるや公共性をもつ者であり、一人の私すべきにあらずと考へていた處、地元有志諸君が郷土史發行協議會を起すの意ある事聞き、夢見る如き喜びの内に昭和二十七年三月初旬、一夕青山政行氏宅に會して下相談をした。その會議に進んで參列した諸氏は（略敬稱）

青山政行 和田武志 平井三男

渡邊喜久造 望月武 牧田平次郎

此の會議に於て堀船郷土史發行協議會を起し、予算、設計等を牧田、望月兩人に委し、廣く町内の各團體、有志に呼びかけその具体化を計る事が決議せられ、梶原商店會、商工會、協和會、郷友會、堀船小學校PTA、保安協會、其他有志の人々に呼びかけ、全年三月二十日、白山神社に會合して協議會を開催した、會議に列席して積極的に意見を述べられたる諸氏は（略敬稱）

青山政行 小宮山嘉藏 水野新治

手塚喜四郎 水越勇次郎 小泉信明

島田貞七	石神徳太郎	田中芳枝
石井英四郎	白木馬之助	平山義範
畑中孝造	島村智光	原武雄
田久保周譽	牧田平次郎	望月武

此の會議に於て

一、郷土史發行に關する事務、其の他一切の必要なる取極め、進行については、牧田平次郎、望月武、に一任する。

一、必要なる諸費用は原則として廣告料金を以て之れに充當する。

一、堀船郷土史發行協議會（假稱）を今日以後、堀船郷土史發行協贊會と改稱し積極的に發行目的の達成に援助を與える。

一、發行の完了と共に同會は自然解散する。

以上の様な事が決議せられ以後、廣告の募集、發行に至る迄の諸事務は發行責任者として牧田平次郎並に望月武がその任につき、着々事務を進捗せしめて予定の通り發行に成功した次第である。

本書發行に功績ありし人々

全國に郷土史はある。而し村史とか、極めて限られた少地域の歴史が完成したという事は餘り聞かない。而しその必要は痛切なものがあり、各層から熾んな要求があつて、私の生地靜岡縣の和地村に於ても、私がまだ小學校へ通つていた幼少の時から村史の編纂と云う事が議に上つたり要望されていた、而し予算の關係や、編輯にその人を得ないと云う様な事に阻害され、遂に今日に至るも實現しない。此の頃村へ行つて見ても此の問題は依然として八釜敷く、その發行が要望されているが未だに實現されてはいない。

私が此の土地に二三十年居住して、此の町の郷土史を發行する責任者として成功した事はまことに光榮として感激にたえない次第であるが、私は運よく恵まれた土地にすみ、而かも町の同情によつて今日を見たので、私の力によるなどは夢にも思つてはいない。出來上つて見れば批判は如何様にも出来るものであるが、戦災や其の他の災害の爲めに古い記録や其の他研究に必要なものゝすべてと云つてよい程迄に失はれた今日兎に角にもこれだけの者をまとめ上げた事について、田久保先生が如何に辛棒つよく、根よく、足に任せ、自轉車に乗つて東奔西走して、苦心せられたかを思い、御

苦勞の程をお察しすると共に深甚なる感謝を捧げ敬意を表するものである。

殊に相當の日子を費されたるにも拘らず、かつて経済的には一錢の御手つだいもせず、全部自費を以てせられた事は申わけなく、又恥しく考えている次第である。

田久保先生を知り得たと云う事が發行を成功せしめた第一の幸であり、次に此の土地に住むすべての人に愛され、同情を以て迎へられたと云う事が、又非常に運がよかつた事であつて、左記の特筆すべき功勞者の方々と名譽を同じうする事の出来る幸運に恵まれたもので、誠に感激にたえない次第である。

本書發行に要した費用は其の全部をあげて廣告料収入を以て充當した。利慾を離れて義侠的に廣告を掲載され此の事業に協力せられたる廣告主諸君に深甚なる感謝を捧げて敬意を表する次第である。茲に本書の發行に當りて、之を提唱し進んで發行の議を興し、積極的に援助せられたる諸氏の姓名を特記して、その榮譽を永久に保存し度いと念願するものである。

なを本書の題字は青山政行氏の筆になり、居住者名簿は松村昌信氏の努力編纂により、製版、印刷製本等は鈴木昞氏の努力によるものである事を特記して感謝の意を表する。

本書の發行に積極的に協力せられし人々 (アイウエオ順)

南國造船常務取締役

青山 政行 井手 錦之助 石井 英四郎

石井 與五郎 石神 徳太郎 北井 清太郎

小泉 信明 小日向 寛 小宮 山嘉藏

鹿田 定 島田 貞七 島村 智光

北區長

白木 馬之助 高木 惣市 高橋 要治

堀船小學校長

田久 保周譽 手塚 喜四郎 富田 直之

堀江善右衛門

問矢 新市 畑中 孝造 原 武雄

區議員

牧田 平次郎 平山 義範 堀江 健次

寶酒造工場長

水越 勇次郎 水野 新治 宮本 常男

和

吉田 作次 望月 武志 和田 喜久實

和

田

武

志

序 文

古き皮囊に新酒を盛るといふ古諺の精神は日本が漢土の文化を輸入して以來永く日本人の温健な思想を養う一つの傳統的的人生觀となつていた。宜なる哉、吾々は過去を知らずして未來を語ることは出來ない。思うに過去は新しきを生む母胎である。譬えば一粒の古き麥種が新しい生命を生吹く如きものである。由來歴史を尊重する民族は繁榮し、歴史を忘却した國民は亡国の嘆きを啣つに至ると云はれる。恐らく歴史を高く評價する國民は過去に照して反省し、行動自から中正、氣風又た高邁なる點に於て繁榮を招來するに違いない。吾々は幸福にして古い歴史と佳き傳統を先代國民から繼承してゐる。幾多の苦難に打ち克ち、營々と進展を熄めない吾が國民の精神力はこゝに潛むのである。

凡そ国の正統的な歴史といふものは權力の爭奪とか、諸外国から蒙つた變動とか、多くは時代の推移の表面に露出した事實を羅列し、當代民衆の實生活には疎遠である。深く思ひを致した場合これと別な歴史所謂民族の文化史が連綿と續いたことに氣がつくであろう。即ち戦乱や社會情勢の麥革など、大きな正統史的事件をよそに民衆の生活は平穩であり、表面に表はれた麥革を巧みに消化しつゝ脈々と續いたものである。譬へば、河水の表は波立つても靜かな底流は徐々に而も間断なく續くと同

様であつただろう。實はこれが吾々に最も生きた親近な歴史である。父祖の温かな息遣いさえ感ずる郷土文化の跡でもあり吾々に深い愛着を揺り起さずにはいない。

筆者は昭和二十二年春から郷土堀船町の知識的青年層と共力して郷土史の研究に着手したが翌年七月この有力メンバーだつた国大生牧田平八郎君の三つ峠に於ける遭難死の災害などが起り、同君分野である江戸時代文献調査は空白のまゝに残つて此の研究會も一時中絶の態になつた。然るところ昨夏同君嚴父にして「ほりふな」新聞主幹であられる牧田平次郎氏から此の成果を紙上に發表するよう御懇請を受け、急速空白の部分进行调查して未定稿として同紙に連載した。其の間更に當地の古老の間を奔走して口碑の収録に努め、且つ連載中の讀者教氏から新史実の教示を受けたりして一段と内容を擴充することが出來た。何分にも堀船町という限られた範圍ではあつたし文献資料は甚だしく尠ないが大體に於て二三の既刊郷土史、若干の江戸時代の地誌、福性寺所有文書、古石刻文及び古老の口碑等を基礎として纏め上げたものである。

筆者は一介の佛教學徒であり考古學や歴史學には全くの門外漢であるが、傳統と歴史を尊重すべき立場上且つは郷土を愛する情から不才を顧みず敢て此の業に先鞭をつけたのである。近世になつて

版されている郷土史研究成果に逸して居る郷土堀船町の歴史を耳にする限り細大となく類集網羅したつもりであるが慮外の粗漏があるかも知れない。貧しい拙稿を更に校訂の上各位の机上におくることが僥倖に會つたことは偏えにほりふな新聞主幹牧田先生の御推挽と町内有力者各位の資助に因るものであり、且つは古老二十数氏の懇切な御教示に負う所であつて讀者と共に謝意を捧げ度い。

昭和二十七年三月彼岸

筆者誌

堀船郷土史

田久保周譽

一、歴史篇

1. 郷土の地誌

飛鳥山を経て上野に連なる一帯の台地には近年になつて数回にわたつて縄文式土器や種々の石器が出土している。従つて此の地域には石器時代にも文化が繁榮したことが知られる。之に反して王子、川口、岩淵などを結ぶ範圍の低濕地帯が住民の居住地として利用されるようになったのは比較的後代で、平安朝（約千百年前頃）までは王子岸町は東京灣のなぎさであつたと云はれる。當時の王子は岸村と呼ばれ、水江の岸という意味で斯う呼ばれていた。かつて岩淵附近の田甫の中から古代の船が発掘されたり、旧英工舎附近にある貝殻塚の如きは或る時代に東京灣が深く灣入して、船が運航し貝拾いの生業も營めた臨海地であつたことを推測させる。殊に川口市はかつて荒川の河口であつたと云う

所を見れば現在の吾々の足下に踏む大地は當時茫々たる海原であつたらう。従つて郷土堀船に関する上代史料のないことは無理からぬことであり、海底に眠つて居た時期は比較的長かつたのである。

平安朝より三四百年降れば堀船一帯の地誌は幾分明瞭になつてくる。福性寺境内には南朝後村上天皇時代の曆應二年十二月（六百二十二年前）建立の板碑及び後小松天皇代應永四年八月（五百五十年前）のそれ等、其他足利時代の石碑は夥しい数である。又寶酒造前、梶原踏切を経て上中里に通ずる道を鎌倉往還と呼ぶことも有名である。恐らく此の経路は常陸下野方面から當地を経て時の政治中心地、鎌倉を行く間道であつたとも見られるがむしろ次に記す豊島氏が鎌倉幕府に参観した要路と見る方が自然である。

治承四年（七百七十二年前）東国に擧兵した源頼朝を卒先支援した豊島清光は郷土の北隣豊島の地に蟠居した豪族であつた。これらの諸資料から見れば郷土一帯が陸地となつて庶民が農耕を営むようになったのは遅くとも約七百七十年以上の昔であつたことは明らかである。

更に降つて足利時代永録年間（約四百年前）の小田原北條氏康時代制作の江戸見取圖には荒川に沿つて豊島村、梶原堀之内村、尾久村などと地名及び地形が圖上に示されている。船方や、郷戸、中里

等の周囲の地名は見られず、特に梶原を出していることは當時比較的に梶原が著名な農村であつたと思はれる。恐らく水害もさることながら、生活に利便の多い水邊で且つ信仰行事にも地の理ある寺の近邊に發達した米作小農村であつたと思はれる。

2. 郷土の展開

こうして漸次米作農村として徳川時代に及んだのであるが、郷土梶原堀之内は南北の二部落中、豊島村とは幾多の血族干系を保ち、尾久村方面とは比較的交流薄く、主として郷土部落を梶原の一部として密接なる部族關係を續けて來たらしい。これは小宮石井の姓が前記の各地に共通して残つてゐることからも推察する事が出来る。福性寺所有の徳川中初期の文書によれば、梶原本邑或は略して本邑と記している。往昔今の大東煉炭會社の敷地に屋敷を有した石井鋳衛門氏の家号は古來「本村の家」と呼ばれている。恐らく本村の宗家という意味である。筆者は郷土の古老からその先祖はかつて梶原に居住したのであるが、屢々の洪水に困却して郷土へ移住したという口碑を仄かに聞いた。これらの点から見て溯つて部落形成の初期には梶原堀之内は、現在の所謂梶原地區が本村であつて此の地から

漸次郷戸方面を展開したものと思はれる。



庚 申 塔

勿論それ以前に部落が出来たとは思はれるが、郷戸に關する早い記録

としては改正道路沿い政所塗料店向いの庚申塔である。これは將軍家綱時代承應二年十一月（二百九十九年前）の建立で、施主九人を連名して居り、次に澤部新太氏住宅西側の庚申塔二基中一は延寶三年十一月（二百七十七年前）の建立で、十名の施主が名を連ね、他の一基は寶曆五年

十一月（百九十七年前）建立で十二名の施主連名がある。庚申待は元來儒道二教によつて中国に發祥した行事であつて、佛教の曆學に混淆して吾が國に傳來した。之は土俗信仰となつて庚申の宵に行はれる全部落の行事であつたからこの石碑の連名は略ぼ當時の郷戸地區の戸數と見て差支えない。又寛延三年（二百二年前）幕府の檢地の際には梶原堀之内全体で戸數四十六であつたと記録されている。

郷戸で最も古い家柄と云はれる小宮孝茂氏屋敷内にある先祖の古塔は足利幕府末期の明應十年九月（四百五十年前）の刻銘がある。これらの資料を綜合して見ると郷戸は略ぼ足利末期に發祥して其の後戸數の増加は比較的緩慢で、徳川時代後半期になつて戸數は梶原堀之内全体のほど三分の一程度であ

り明治初年には二十戸を数えたらしい。延寶年間以降の福性寺所藏記録には此の地は度々神戸、合戸などとも記入されている。いづれが古來の正統的名稱であつたのか不明である。或人によれば往昔、かつて此の土地に神戸某という武士が居住した故事によつて斯く呼ばれる様になつたというが、確實ではない。

3. 梶原堀之内村

梶原という郷土の地名は比較的古い時代では前に記した小田原北條氏康時代（約四百年前）の江戸地圖に現はれている。此れには梶原堀之内村と呼んでいる。降つて福性寺門前にある天和二年（二百七十年前）建立の地藏尊の刻銘には武州豊島郡梶原堀之内村とし附近にある別体の安永八年（百七十三年前）建立の一尊の刻銘にも同様梶原堀之内村念佛中と記してある。これは戦国以來徳川末期まで郷土一帯が梶原堀之内村と呼ばれたことを立證するものである。従つて明治以後大東京改編に至るまでの間、大字堀之内小字梶原乃至は郷戸と呼んだのは古來の傳統的な名稱を正しく繼承したものでなかつた。

東京都教育廳に出仕される関八州の郷土史研究家稻村坦元氏はかつて當地に來訪された折に次のように語つた。

「堀之内とは戦国時代の豪族の據点、即ち陣屋を水濠で圍繞した區域を指すものであつて、各地に此の名稱が散在しているのは群雄割據時代の遺稱である」

と。恐らく此の解説は傾聽すべきである。梶原堀之内というのも豪族梶原氏の陣屋周邊の地域に名付けたのであつて、其の眞意は梶原家之堀之内という程のものであつたらう。

郷戸の堀江平次郎氏の談によれば、雜司ヶ谷鬼子母神で有名な新田堀之内は郷土梶原堀之内の飛地であつて徳川時代末期迄兩地の間には交渉があつたと云う。然りとすればこれは梶原堀之内の新田と云う意味で新田堀之内と名付けられたのである。一方、新田堀之内にも此の事情を裏書する傳説が残つて居り、大徳元祿年間に分郷が行はれたという。此の地は明治維新まで梶原堀之内と同様に水野、齋藤の兩幕臣と寛永寺に分領されていた。

4. 船 方 村

船方は現在堀船町二丁目地域の古地名であつて昭和初年當地が大東京に編入されるまでは王子町船方と稱し、旧幕時代までは船方村と呼んだ。此の地はかつて尾久村から分郷したと云はれる。一説には船方は地名類聚抄豊島の條に現はれる七郷中の一占方（宇良加太）郷の故地であつて、此の古地名が轉訛して船方となつたのであるというが、此れは更に一段と考證しなければならぬ。大体地名類聚抄は朱雀天皇承平年中（約九百六十年前）に編纂された明確な歴史を有する文獻であつて、此の頃に郷土一帯が陸地となつて土着民が居住したことは頗る疑はしい。恐らくこれは両地名が類似する点から着想した以外のものではない。船方の「方」とは大言海によると一義に「其の方の人、組、仲間部」などという意味があるが、此の語義から推察すれば、恐らく「船の組、船の仲間」というような寓意に於て名づけられたと思はれ、水邊に生業を営んだ部落を呼んだものに違ひない。此の地は昔舟方と書いたようである。小田原北條氏康の永録役帳にも延命寺西側にある正徳二年（二四〇年前）建立の地藏尊石刻文にも舟方と誌してある。

船方村の郷土歴史も容易につかめない。傳説によれば延命寺は應永年間（約四七〇年前）遊園地前の宇小橋から現在の地に移轉したと云はれる。かつて明治中葉の頃、田中榮吉翁の父祖が煉瓦製造の

ため小橋の土を採取した際に夥しい古銭が出土し、人々はその地点が延命寺所在の旧跡であつたことを知つたという。

従つて延命寺はその敷地に現存の地藏尊小宇を残して移轉したのである。そのためか船方では最近までお盆の折には此の地藏尊まで精霊さまを送り迎へたと傳はつている。其の後寺は安政二年に火災に遭つて、一山全く烏有に歸して記録も失つた。こうして移轉と火災の爲め古板碑とか記録が殞滅した爲め調査の素材は乏しい。

船方の旧家石神與八氏宅には家系譜を藏して居り、文明、永祿の頃に既に當地を開拓して居住したことを傳えている。これは今から四百八十年程昔にあたり、梶原一帯が凡そ七百年以上の過去の歴史を推定することが出来る以上既にその當時農村が發達していたことは當然である。

其の後徳川時代に入り寛永三年（二百二年前）幕府の檢地に際しては戸数二十四戸であつたと云はれ、古老の談によれば明治初年にも戸数は小橋十二、船方木村十二、計二十四戸であつたと傳はる。

此の地は明治二十一年四月町村制發布によつて王子村が成立する際、とくに地理的便宜のために大字向端のうち東部の二五五番地以上を上尾久に編入した。これは現在の遊園地の東部分から尾久変電

所一帯の土地である。

5. 郷土の支配者

鎌倉時代、今から凡そ七八百年前頃から我が郷土史は仄かな黎明となるが、其の初期の暫らくは標題の問題は明かではない。今は當時の情勢を綜合することによつて想定を試みよう。

文治五年（七六七年前）頼朝の東征に従軍した豪族豊島清光を初めとして一族は其の後も源家に忠勤を捧げて居つたから、執權北條氏を経て足利幕府の成立頃迄豊島氏は吾が郷土一帯をも併せ支配したに違いない。其の後此の間の事情を偲ばせるものとして次の資料がある。福性寺所在の板碑のうち足利將軍義教時代の正長三年（五一六年前）五月という刻銘をもつたものがあるが實は正長は一年丈で改元して此の年は永祿三年に相當する。更に他の一は福徳二年（四五八年前）八月と年代記しているが、これは私年号であつて朝廷の欽定年号は延徳二年である。こうした年号僭稱は朝廷に對する反感から鎌倉の關東管領家が敢てした處である。従つて今を去る五百五十年乃至四百五十年の間は關東管領家の支配下にあつたのは明瞭であつて、更に細かに云えば管領家の家老上杉家に隨順して居

た豊島氏が續いて領して居たであらう。

豊島氏がその後宗家上杉に背反した、め文明九年（四七五年前）扇谷上杉の家老太田道灌に滅されて後は地形上から見ても太田の配下にあつたらう。其の後天文、永祿年間になつては小田原北條氏が當地一帯の覇權を握り、永祿二年（三九二年前）の文書によれば梶原、船方などは北條の部將太田新六郎の所領となつていた。梶原政景は凡そ此の時代の一小領主であつたらう。天正十八年（三六二年前）秀吉の東国征討後は當然其の治下にあつたと思はれる。藤堂和泉守が一時郷土の領主となつて白山神社を造營したというのは豊臣氏の時代であらう。

田中榮吉翁の談によれば、現在荒川遊園地のある小台向端は明治末年まで屋敷の山と呼ばれ、そのかみ藤堂和泉守の下屋敷があつたと傳えられたという。

徳川時代になつてから梶原堀之内は水野、木村、齋藤等の各鷹匠及び寛永寺に分割食領とされ船方は寛永寺領となつて明治に及んだ。幕末寛延年間（約一二〇年前）堀之内全体で戸數四十六戸、石高百八十石に達し、船方は二十四戸五十石餘であつたという。亡石井與五郎翁の記憶によれば、明治初年の梶原は全体で二十二戸の農村であつた。徳川初期以來の梶原の地頭は水野藤右衛門と云い、その

長男信定は延寶八年死歿して福住寺に埋葬されている。傳説によると信定は劍道練達の強豪であつたが、故あつて菩提所駒込吉祥寺をさけて所領地の福性寺を葬つたという。今も墓碑が残り本區十條町に居住する子孫が守つてゐる。

明治維新の後當地一帯は武藏縣知事の所管となつたが、其の後間もなく編成替へによつて浦和縣に編入された。明治四年には再び東京府に復歸して府下を六大區に區分したとき當地は第四區に屬した。更に明治六年に區域変更があつて梶原堀之内と船方は第九大區第三小區に分屬した。

明治二十一年四月、市町村制施行と共に王子村を編成して今日に至つたのである。

6. 明治以後の郷土

明治時代に入つて東京が帝都となり周邊は近代工業が勃興する氣運に向つたが、先づ明治四年石神井川べり郷戸の對岸に澁澤榮一氏の主宰した王子製紙會社が設立され、續いて明治八年印刷局抄紙部が設置され、各地から工員が定住するようになつた結果、地形上先づ郷戸方面の人口は漸次に増加した。當初は農家の別棟とか奥座敷などに寄宿していたが、遂に明治二十年頃には貸長屋が建築され初

めた。それにしてもその當時は郷戸から南の田野を展望すると淺草の五重塔、十二階などを一望の裡に收め得たといはれる。降つて明治三十九年には東洋紡績の前身たる下野紡績が船方の北角をトして工場を建設するに至つて漸く梶原、船方方面にも繁榮が波及するようになった。明治十年頃は郷戸廿五戸、梶原二十五戸、船方十二戸に過ぎなかつたのが、同四十一年頃の梶原には此の外に現在内川自轉車店の位置の八軒長屋、寶酒造北側道路沿いの四軒長屋などを加えて二十戸ばかりが増加した。船方にも大正五年頃には旧來の居住者の外に十二三戸の家屋が新築された。斯うして緩慢ながら絶えず發展を續け、更に下野紡が三重紡績となり三轉して三重紡績を東洋紡績會社が買収經營し、大正六年頃にその西側に第二工場を建築するや、大正十二年當時の極盛期には男女工合せて二千三百名にまで達したので勢い當町は益々人口が漸増し、その頃の梶原の戸数は約四百に上つた。その頃には旧來の土着者も概ね農耕を廢して一帯は半都會風の地區となつた。

大正十二年大震災の際には當地區の地盤が軟弱なせいか大半の家屋は倒壊し、現在の梶原銀座の商店街の如きは殆んど軒並みに壊滅した。其の後町は急速に復興すると同時に東京市民が大震災の慘憺たる苦難に慄えて都内から移住するに及んで急激に立錐の餘地無き住宅地となり、殷賑を極めた。や

がて三輪方面から延伸して来た都市計画による環状線道路は、昭和五年當町西角を縦断完成して淺草方面との交通は至便となり戦災前昭和十七年頃の極盛時に戸数は郷戸八百二十、梶原千七百餘、船方二百二十餘に及んだ。次いで太平洋戦争の戦火は梶原の神社及び寺とその周邊少数の家屋を残して一木一草も餘さず一望の焼野原と化せしめたが、戦後營々たる努力により漸次工場兼住宅地として復興しつつある。

二、社 寺 篇

1. 白山神社

村社白山神社は伊弉那岐尊を祭神として昭和四年村社に昇格した。當時の町會理事者たちは村社に列するための歴史を模索するのに非常な苦心をしたと云はれる。恐らく徳川時世に入る前、豊臣秀吉の関東平定頃と思はれるが、かつて此の邊一帯が藤堂和泉



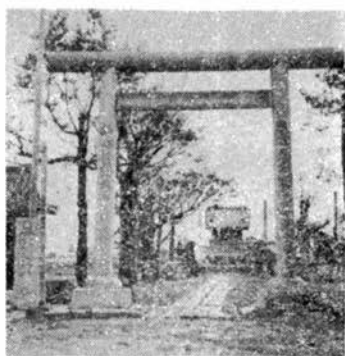
白山神社

守の領地となつた頃彼れの命令によつて此處の社殿は修築されたことがあつたという。吉宗時代の北町奉行記録によれば、此の神社は當時福性寺住職が別當に任ぜられていたと記してあるが、明治二年神佛分離の太政官布告が下るまで其のまゝであつた。

古老の話によると明治十年頃の五月十五日の「ぼんぜん」という祭禮には麥苞に氏子の数丈の紫白赤なぞ五色の紙でしつらえた御幣を挿し立て神輿として現在の梶原渡しの場所を擔ぎ出し一同裸形になつて「歸命頂禮懺悔々々六根清淨」と唱和しながら各自に河水を浴せ合つた後、御幣を手に手に持ちかえり家々の庇にさして悪魔退散の守符とした。其の後五月二十日頃になると巡行して隣村まで來ている北足立郡平方村の獅子面を、村の年番が奉迎して歸村し梶原と郷戸が年毎に前後番となつて村中を練り歩き、同時に豊島、中里などの村境に各々二本の生竹を樹てノ繩を張つて郷内を悪疫の侵入するのを防ぎ祈つたという。また平方の獅子面が巡行に出達する前祭には必ず村から代表が列席するをつねとした。此の獅子面の巡行は瀧野川あたりでは今だに行はれている。

現在此の神社では大祭を九月十九日、中祭を五月十九日に執行している。

2. 十 二 天



船 方 神 社

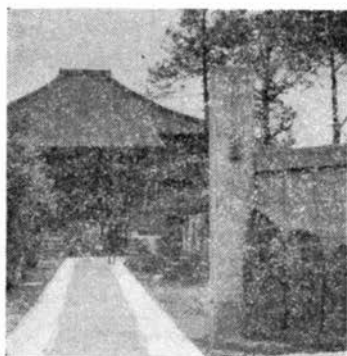
村社船方神社は神佛分離後日本武尊、大国主神、少彦名神
猿田彦神を祭神とし、大正十一年十二月村社に昇格した。

此の社は幕末まで十二天或は十二社とも異稱した。もと豊
島清光の息女足立姫が破鏡の悲しみから入水した折、これに
殉じた十二侍女の遺骸がこゝに漂着したので之を十二天とし
て祭つたという傳説がある。

思うに十二天とは恐らく佛教、殊に密教の教義で佛の付托
によつて一日十二時を分擔して世間を守護すると信ぜられた金剛等の十二神將を指すと信ぜられる。
そのかみは十二侍女の奉仕の極地を世間守護に任ずる十二神將の神格になぞらえて崇拜したのである
延命寺の陽の方向に當り、而も眞言宗の天部を祭祠したことは寺と神社との密接な干系を暗示してい
る。恐らく延命寺が現在地に移築された頃、寺僧が地鎮神祇として祭つたのであろう。此の神社でも

大正年間まで「ぼんぜん」の祭禮が行はれ、現在四十五六歳の壯年たちは唇を紫色にして河の水に浸つた少年の日の思い出を懐しんでいる。現在大祭は九月八日、中祭は五月八日に執行している。

3. 白王山福性寺



福性寺

この寺は現在眞言宗豊山派に所屬し、境内墓地總計八百九拾坪、檀徒二百餘を有している。徳川吉宗時代（約二百五十年前の北町奉行記録には「當地年数不知、本寺沼田村恵明寺末 眞言宗福性寺、寺内三十間四方」「當地白山權現、年數不知、宮地表二十間、裏十八間、右福性寺懸持」とあつて大體當時の規模を想像することが出来る。これによれば傳説に知られている通り白山神社が福性寺の神祇であり、且つ當寺住職が別當職に任じていたことは明瞭である。

白王山という寺の山号と白山神社の名稱との間にも密接な連繋があつたに違いない。それ以前の歴

史は屢次の火災或は無住職時代の荒廢なぞの爲めか明瞭を缺いている。寺自身の傳承する古文獻も古くは寛永年間（約三三〇年前）を頂点として夫れ以前の歴史は杳として明確ではない。然し乍ら境内には前に云つた通り足利初期曆應二年建立の板碑が現存し、遅くとも六百十餘年前には既に部落の菩提寺が造立されてこゝに佛教宣布の法鼓が打ち鳴されて居たことは疑えない。境内殊に本堂所在敷地は一段と高くなつて居り、此の地の祖先が曾つて黙々として祖廟建設の爲めに土盛りの淨業に汗を流した跡が偲ばれる。

寺域の中には梶原一族の古墳がある。これは前述のように明治三十七年夏、陸軍工廠構内から移轉したものであつて現存は主墳一、五輪塔一、小墳六基から成立つて居る。小墳の二基には梶原一族追善の爲めに造立した經緯を述べた石刻文がある。

現存の本堂は大正十二年関東大震災に倒壊した後を享けて建立された椅子式の假本堂であつて、大平洋戦争前鉄筋コンクリート近代様式本堂として改築の方針が決定し、資金の勸募も完了した。時恰かも戦争熾烈となり、果ては敗戦に終つて遂に此の計画は實現しなかつた。然し偶然戦火に類焼するの難を免れて戦前の規模に少分の改修を加え現形を保つて居ることに不幸中の幸いであつた。

4. 船方山延命寺



延命寺

この寺は眞言宗豊山派に所屬し、墓地境内總計六百七十坪餘り、檀家二百十餘戸を有する。

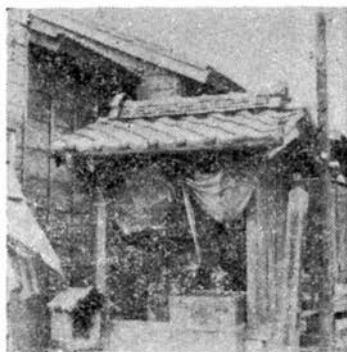
屢々の火災或は荒廢の時代があつたらしく寺自身の有する文書は安政二年（約一〇〇年前）の火災以後のものである。徳川吉宗享保年間（約二四〇年前）北町奉行役帳には「當地年數不知中本寺興樂寺末、眞言宗延命寺、寺内云々」と記録してある。

船方村の項で述べたが此の寺はもと遊園地前字小橋から應永年間（約五五〇年前）に現地に移轉したと傳えられている。これによつて當寺が悠遠な歴史を持つていることが知られよう。又現地には古板碑、石刻文などが傳はらないのは恐らくこのためであろう。

當寺の建造物一切は昭和二十年の戦火に遭い全く烏有に歸して現在は假堂を建立して禮拜の用に供

している。將來は更に伽藍を整備して面目を改むる方途を推進中である。

5. 愛宕地藏尊



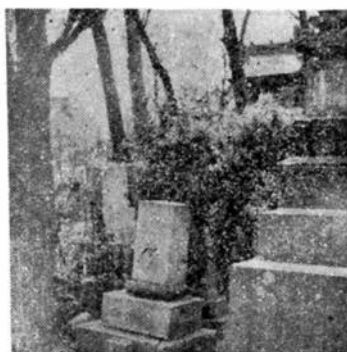
愛宕地藏尊

此の小宇は往昔から小泉初太郎氏の先祖が代々奉仕して居り、もとは市川履物店の背後あたりにあつた小泉氏宅地内に立つて居られた。大正末年になつて小泉氏が梶原銀座通りに店舗を構えるようになつて現在地より稍奥の露路沿いに移轉したが、更に戦災後現在地の商店街沿いに移されたものである。此の尊は徳川期の始め以來地頭水野家から少額ながら年々供米、灯明料を寄進されて居たと云はれ、由緒古き佛宇であり、眼病平癒の祈願佛として尊崇されていた。聞く處によれば、そのかみ小泉氏の祖先が本郷の水野氏邸から此の地に勧請したと云はれる。昭和初年以來商店街の奉養によつて縁日が開かれたが、戦後毎月三日の日の祈願佛として人出に賑はつてゐる。

三、遺跡篇

梶原墳

1. 梶原墳



梶原墳

梶原堀之内という古地名の起源となつてゐる梶原墳は、明治三十七年迄後藤半七氏宅北側の陸軍貯炭場に在つた。同三十七年夏軍工廠擴張の際福性寺境内に移轉して今日に及んでゐる。移轉工事の節寶篋塔の下から古銭、馬骨らしきものと共に蛇などが出て來たと云はれる。古老の話によると、當時此の塚は荒川の水邊に近く土饅頭があつて、夫れを取り圍んで寶篋塔と數基の石碑が立ち並び、周圍には數本の大樹と竹や雜草が生い茂り足を踏み入れる人としてなかつた。明治中葉頃にはこゝに大きな胡桃の木があつて季節になると里の子等は此の實を拾つて樂んだといふ。

今から約二百五十年前將軍吉宗時代の北町奉行記録には此の地について次のように記してある。

當地年數不知、本寺沼田邑恵明寺末、眞言宗眞龍寺、寺内百二十坪云々。

此の記録によれば、當時此處に眞龍寺という寺があつたことは明らかである。石井銀衛門氏は此の地にかつて同名の寺があつたことを父祖から聞き傳えて居り、故人となつた石井與四郎翁も此の地に元祿年間（約二七〇年前）何處からとも無く流浪の比丘尼が來て庵寺を修築して居住し、當時里人が此の人は梶原氏の縁者であると語り合つたという口碑を傳承して居られた。

禪性寺に移された石碑にも「文政九年……梶原墳眞龍寺」と記した墓誌がある。こうして見ると今から凡そ百三四十十年前迄はこゝに梶原墳を守る眞龍寺という佛宇があつたことは明かである。此の塚一帯には固と夥しい石塔があつたが、荒川の屈曲点にあるため河岸が漸次浸蝕されるに従つて尠からざる石碑、石壇等が河中に陥没してしまつたと云はれて居る。

思うに此の七八畝の土地は郷土を占據した梶原氏の屋敷跡であつて、後代一族の冥福を祈るためにそのまゝ寺として眞龍寺と呼んだのであろう。

2. 梶原屋敷のあるじ

梶原壇のあつた旧梶原屋敷は會つて梶原源太政景の館跡であつたと思はれる。天文年間から永祿年間（四三〇―三九〇年前）にわたつて居城岩槻を本據として松山城、川越城などの争奪をめぐつて、越後の謙信を背景に小田原の北條氏康と劫争を續け、敗れたりとは云え上總の雄里見義弘を勧誘して相共に北條氏康の大軍を迎えて永祿七年（三八七年前）下總鴻台に關東の覇を争つた太田美濃守資正は彼の父である。資正には長子資房次子妾腹の政景があり、外に一女子があつたが、永祿末年の頃になつて、城中は資房、政景兩派に分裂して内訌を惹き起した。政景は利あらず岩槻を追はれ、剩え資房一派は敵方北條氏政と款を通ずるようになったので、父資正も常陸に亡命して佐竹重義の許に流寓した。政景は岩槻を立退いて後、父の流寓には隨從せず、梶原美濃守政景と名乗つて武藏国豊島郡に住したといふから近郷の覇者豊島、太田兩氏が衰亡した以後永祿年間から天正年間（三九〇―三六〇年前）の頃迄此處に住したと思はれる。之より先、彼は足利義滿時代に關東管領家の部將として關東に住し康暦二年下野の住人小山教義の反乱を鎮定した梶原美作守道景の第三代を嗣いだのであつた。養家梶原累代の家系や當時の勢力關係から判断すると、政景は梶原に在つて小田原北條氏の支配下にあつたに違ひない。

然も當時郷土一帯は永祿初年以來北條氏から太田道灌の孫にして又政景の同族であつた太田新六郎資康に領邑として授けられていたので、恐らくその庇護の下に立つた一部將であつた。こうして時によつて敵味方に向背ある流轉の變相は、戦国部將に敢て奇とするところではなかつた。孰れにしても永祿初年の小田原北條氏の地圖に、郷土を梶原堀之内と記入している以上政景はそれ迄には此處に住していたのである。鎌倉大草紙には政景の養祖父道景の末子景則は甲斐の國に移住して謙信に仕えたと傳えている。天正十八年(三二二年前)豊臣秀吉の東国征伐後天下の争乱は全く平定して渺たる一武將の武断は許されなくなつた結果、實父資正が後年佛門に歸依して三樂入道と稱した先例に倣つて彼政景も或は眞龍とか稱してその館を佛宇として俗塵を絶つたのであらう。且つ此の地に墓碑、墳などの残つたのは彼が此處で終焉したことを物語つてゐる。

一体小田原北條氏は日本外史にも見える通り秀吉からの歸降勸告を屢々拒否し、遂にその征討を受けて滅亡したので敗戦後北條一族は秀吉に登用されていない。支配下の政景も同様の環境にあつたと思はれるが、此の後約九十年を経た元祿年間に流寓して來た比丘尼なども、恐らく傳説のように落魄した政景の縁者であつたらう。

3. 堂の前遺跡

堂の前は小字名にも残つて居り、内田自轉車店横の防火貯水池の位置に相當する。明治末葉までは石碑が二十基餘り残存していたが、其後次第に失はれたと云はれる。福性寺記録によれば、今から凡そ二百年程前には此處に宗福寺と稱する一字があつたらしく其の後此の寺の檀家は漸次福性寺を吸収された。その堂宇に因んで堂の前と呼ばれたのである。明治の中葉までは大雪がふると此處を境として郷戸と梶原で道路の雪掻き作業を分擔したという。

4. 鎌倉往還

これは鎌倉間道とも呼ばれ、豊島西福寺脇から寶酒造横を経て梶原商店街を縦貫し、環狀道路を横斷して平塚神社に至る古道である。此の道路は常陸下野えの間道というよりは、むしろ隣地豊島郷の豪族豊島氏が時の権力鎌倉幕府に赴く場合の通路であつたと思はれる。従つて略々七百年來の古道であつた。かつて此の道路の歴史を惜む何人かによつて梶原と中里の境界即ち今の環狀線道路との交叉

地点に「鎌倉往還」と刻んだ石碑が建つて居たと云はれ、十年位前までは残存していたのであるがいつの頃からか姿を消しているが惜しいことであつた。

5. 板 碑



板 碑

板碑とは高さ概して二尺五寸前後の平板型をなした石に諸佛の梵字或は戒名などを誌して供養追善のために造立したものである。下部は現行の塔婆のように尖つて居り、恐らく土饅頭の上に挿し込むに便ならしめたものである。原石は秩父の綠磬石の一種であり、人によると、四国伊豫の濱石に似ているともいふ。現存する板碑中練馬谷戸の白山神社頭にある弘安年間造立のものが凡そ六百七十年を閲して居り、稀に古きものとして有名である。

福性寺境内には南朝後村上天皇の暦應二年十二月に建立され、爾後六百十二年の星霜を経た一基の

板碑がある。これまた近郷で發見された中では屈指の古碑である。表面には諸佛の名字を刻み、蓮花二瓶を彫刻して一種の供養塔の形式を採つていて戒名は誌して無い。勿論此の時代に在つても富裕者の墓碑は五輪塔などの贅を盡したものであつたが邊陲の庶民は一柱毎の石碑とてなく、一基の板碑に誠意を托して父祖群靈の惣供養塔としたことが明かである。それにしても馬背か或は船運に因つたか數日を費して平地まで搬出した此の片々たる綠磐石は當時の庶民に寶石のように貴重な資料であつたに違ひない。

四、行事篇

1. せえの（歲納）神故の事

これは毎年正月十四日に部落の男兒達の間に行はれた楽しい神事であつた。歳の暮れに奉遷した神棚の祭供や新年の儀式に使用した御神供、さては門松などを共力して戸毎に蒐めまはつて一個處に集積し、天を焦すような大焚火として焼却した。此の際蒐集の少年たちの手には各戸から二三枚の銅幣

が贈られ、終つて各自に平等に分配された。少年たちは各々家から餅を携えて來て此の焚火に焙つて食べ、又一年中の風邪外け薬として焙り餅を家族への土産物として家路についたといはれる。恐らくこれは關東北部から東北地方に今日も行はれている「どんどん焼」の行事であつた。

此の行事に従う兒童は最高十五歳までとされて居て、部落中の十五歳の少年が年少者を指揮して行つたのである。當番の少年は當年の首長として行事を主宰することに晴れがましい誇りを感じたが、來年は成人の仲間入りをして此の少年行事の會衆を脱しなければならないという淡い感傷があつたとう。

此の行事は郷戸、梶原、船方三部落別々に行はれ、郷戸では政所塗料店向いの庚申塔の邊り、梶原は内田白轉車店向い貯水池の堂の前故地、船方では東洋紡績構内となつた庚申塔の近傍で夫れ夫れ執り行はれた。こうした少年の日の思い出は、現在四十五六歳以上の人たちの遠い夢に連つてゐるらしく郷土の懐旧談には屢々出てくる話題である。それにしても強いて成人の世界へ引き込まれようとして居る現在の少年たちに比較して當代の彼等はまことに墨繪の中に在る人物のように茫洋として又大らかであつた。其の後各種の事情から大正中期を境として此の風習は絶滅した。

2. 庚申待ち

部落の定例行事の中で庚申待は傳統豊かな古い儀式であつた。此の儀式は佛教と道教とが混淆して初めは中國に自然發生的に起つた土俗信仰であつた。人の壽命まで左右する全能の上帝に使者の三猿が、庚申の節會に次回の死者を上申指名する災厄を攘う爲めに、徹宵猿に奉仕するという信仰から起つた極めて古い儀式であつた。本邦に佛教が傳來すると共に此の信仰も將來されたが、吾が国では斯る陰慘可畏な内容を捨て一部落の懇親機關として永く傳承されて來た。

此の諸部落にも庚申會が行はれたが、例を梶原に取ればもと石井與五郎氏邸の南側に在り、現在福性寺門前に移祠されている庚申塔を祭神として部落二十数戸が戸毎に月番で宿となり、夜を徹して庚申待のお籠りをし、當夜は夫婦の同衾が禁忌とされたという。當番の家には祭神の軸を掛け灯明供物を設け、祈願誦出の後に各自米三合に十錢持ち寄りの會費で御馳走を調べ、夜の更けるのも忘れて漫談怪談に一夜を語り明かしたと云はれる。

3. 參拜講

各部落には伊勢講、富士講、大山講、御嶽講などの参拜講があつた。これは各々講名の社寺を参拜團を送るために毎月輪番で各戸から集金して掛金を集めて蓄積しておく相互扶助の団体であつたが一面には村の融和機関としての使命を果した。例を郷戸の伊勢講に取れば、四軒の年番があつて毎月一月十一日各戸から「五合五ぢゆう」と謂つて五合の白米と五厘の鳥目を集め、これで當時としては大變な御馳走であつて、白米飯とにしめを調べて晝間は小兒たちに存分に振舞をして、夜になると各戸から一人宛成人が宿の家に集合して伊勢参拜の代祈願をした上饗應を受けたという。

五、傳説と口碑篇

1. 石神井川とその傳説

石神井川はその源を石神井三寶寺池に發して音無川となり、飛鳥山の裾をめぐるつて堀船町と王子、豊島との境界を劃しつゝ荒川に注いでいる。

郷戸の堀江平次郎氏の祖父は往昔幕府の命令によつて河幅を擴張し修築を率領したと傳えられる。

此の川は高台を貫流するために河岸高く近郊にめずらしい溪谷美さを見せているが、上流の降雨時には渦巻く激流となる。旧幕府時代豪雨の日に上流から奇怪な大獅子の面が漂流して来て、之を追つた郷戸の若衆某は激流に吞まれて行方が知れなかつたという。

徳川時代から明治初期にかけて郷戸の旧居住者には此の川にまつはる傳説が語られていた。いつの頃か此地の里人が馬を曳いて他出の歸途、上野の近くで見馴れぬ美女に遭い、乞はれるまゝに馬の背に載せて石神井三寶寺池のあたり迄行つたところ、突然此の女性は蛇身に變化して池の中に没してしまつた。其の頃十條姥ケ橋で耕地を出かける途中の農夫が松の大木と見まちがつて跨いだ大丸太がむくく〜と動き出して驚倒して視るとこれは大蛇であつた。當時里の人々は上野不忍池がだん〜狭くなつたので、辨財天の精靈なる大蛇が、此の池の上流の三寶寺池え居を移したのだと語り合つたといふ。

神2、大槌

2. 齋藤學校

明治の七八年頃には勿論公立の小學校などは無く、所在の學識者が寺小屋式の教授を行つて居た。

當地では石神井川沿いの堀江清勝氏旧邸向いあたりに幕府の祐筆職を先祖とした齋藤国太郎氏が居住して初學の學童を薰陶した。主として堀船、瀧野川、豊島などの童幼が集まり盛んな時代には百六七十人にも達したことがあつた。教授内容は四書五經といつたような初學者にはひどく難解な漢學であつたが、兒童は懸命についていつたと云はれる。その後明治十年頃公立小學校の開設と共に自然廢校になつたが、大正初年長壽の国太郎翁が米壽に達した時、多数の教え子たちが集まつて盛んな祝賀式が行はれ翁を慰めたという。以上は郷土の古老たちの談話である。

3. 女体權現（駒塚）



現 權 体 女

これは佐藤製衡所構内の荒川河岸にある小祠である。かつて三四本の樹の下に石碑と共に鎮まつて居たが、去る二十年四月の爆撃で跡方もなく四散してしまつた。現在では小田原の道了尊を祭つてあるようだ。此處は天文の昔、豊島清光の息清泰が馬術訓練中に狂奔した乗馬もろ共、河水中に陥没し

た場所と云はれ、其の英靈と乗馬の爲めの祠であると傳えられた。一体權現とは平安朝以來の兩部一実神道から起つた信仰であつて、日本の神々を佛菩薩の化身と見る思想である。それにしても女体權現とは甚だしく奇異な神である。

恐らく觀音菩薩を眞意に潜めつゝ日本化した辨才天女を奉祠したのであらう。この女神はもと印度のサラスワテイ河の神靈と信ぜられた女性神である。佛敎の東漸と共に日本に傳來したが、従つて水に由縁ある神とされている。因みに此の祠の所在地の小字は女体と呼ばれる。



浅間神社

4. 浅間淵

現在の寶酒造會社對岸の宮城町側を淺間淵と呼んだ。對岸の河岸から約一丁程奥に淺間神社があつて大正末期までは數本の大木が鬱然と聳えて居た。恰かも荒川の屈曲点の内側に在り、河水が梶原側へ突當つて反轉する空際に自然生じた淀である。

淺間神社はその後宮城町村社に合祀されて移轉し、旧宮地は小高い畑地に變つてゐる。最寄りの宮城町九七四に住む石井みち氏は旧淺間社にあつた杉の大木を社殿として、御神体を分祠して屋敷内に奉養して居るが、近く此の一帶が汚水淨水場となるので此れ等の遺蹟は殞滅するであらう。

こゝには昔から豊島清光の娘足立姫の怨靈が水牛となつて棲んでゐると信ぜられた。荒川が増水したときなど轟々たる瀬の音を聞いて梶原の村人は、足立姫の水牛が水を潜つて荒れまわると語り合つて怖れ戦いたという。淺間神社は富士の神靈木花咲耶姫を祭神とする。此の女性神が足立姫と結び付いて傳説を生じたことは極く自然である。

5. 往昔の豊石橋一帯

豊石橋は明治二十四年橋脚を双輪型に造營して俗に眼鏡橋と呼ばれ、其の後昭和三年に現在の鉄筋式に改修された。それ以前は粗末な土橋であつて何故か番太橋と呼ばれていた。享保の頃、夫婦の六部行者が善根積集のために架橋したと云う傳説があるが、或は夫れによつて此の俗名が生じたのだらうか。明治二十年以後でも此の橋の梶原側は腰卷稻荷の森が氣味悪く覆い被り、附近の水車小屋で白

を覗く肩に貉が飛びついたり、眞夜中に貉が民家の雨戸を叩くことなぞ屢々であつて、日暮れてからは人通りも稀だつたという。

6. 梶原渡し

明治三十九年今の東洋紡績工場の前身下野紡績工場が現在地に建設され、宮城方面からの通勤者が増加して小台渡しを経由することは非常に不便だつたので、梶原側石井惣吉、宮城町側阿出川伊三郎両氏が部落代表となつて両地の住民賛同の上明治四十二年申請開設して今日に至つたのである。今だに櫓を押す大時代風な悠々たる渡船氣分を満喫できるのは微笑ましい限りである。とは云え此處に架橋して對岸五六百戸の宮城町との交通を便にし、且つ両地の發展をはかる構想は二十數年來の要望である。いつの日かこの宿望を実現し度きものである。

7. 彰義隊余聞

慶應三年夏、上野輪王寺公現法親王を載いて官軍薩長兵と戦つて敗れた彰義隊兵士は、多く中仙道

を経て板橋方向へ敗走したが、一部は道灌山下を三河島、王子方面へも三々伍々離散した。之を追撃する官兵と入り乱れ、肩にした拔身の刀槍が陽にきらめいて田甫の向いに見え、竹山の奥に潜んだ里人の身邊には銃丸が跳弾となつて荒れ狂い、剩さえ道灌山の台地からは大砲を打ち込まれるなど、生きた心地なく聲をひそめていたという。此の時には某地の某は彰義隊士が他日を期して糞溜の中に隠匿した莫大な軍用金を拾得したとかしないとか、種々の風説は乱れ飛び、戦闘地域に近かつただけにまことに騒然たるものがあつたという。

8. 埋 木

大正二年現在都電となつてゐる舊王子電氣軌道敷設の頃、船方車庫の敷地を掘開したところ、地下數尺の深さから直徑二尺、長さ數間に及ぶ埋れ木が泥炭ようになつて發掘されたという。又中里の貝殻塚の附近では旱天のときなぞ地表が船形をして割れることがあつて、古老はその下に船が埋没してゐることを察知したという。その外大きな枯木の梢が地上に露出して居たり、郷土一帯が陸地となつて餘り遠くないことを物語る遺物が多かつたらしい。これは田中榮吉翁の談話である。

9. 王子電車の開通

三輪から王子驛前を経て赤羽、早稲田などに通ずる現在の都電は、昭和十七年二月一日交通局に買収されるまで、王子電氣軌道株式會社が業務を經營していた。發足當時の工事殊に當町区域内は明治四十三年起工し、大正二年三月になつて三輪飛鳥山下の區間が開通したが當時は保有車台數は十二にすぎなかつたという。

其の後、山下から王子驛前を経て飛鳥山を連絡し、更に昭和四―五年に亘つて早稲田、赤羽まで延長して社運は隆盛に向い戦争激化と共に都交通局の傘下に吸収されて此の社の歴史を閉じた。

そのかみ業務草創當時の十年近くは田畑の中を走る田舎電車であり、従つて乗客は寥々たるもので經營者の困窮苦心は慘憺たるものがあつた。その窮境打開のため觀櫻期には飛鳥山にその頃めづらしいイルミネーションを点じたり、納涼時節には螢を放つたりして乗客の吸収に奔走したという。然し大正十年頃から、殊に全十二年の大震災以後には沿線一帶の人口が急激に膨脹したため社運は漸次向上した。現在でも荒川車庫には會社時代からの古參従業員が二十三四人も居り、古い乗客には親しまれているという、地方色のある都電となつてゐる。

10. 郷戸の長壽翁

堀船町一丁目八八八の郷戸區域には當町最高の長壽翁がある。藤代茂助氏と云つて萬延元年生れで當年取つて正に九十四歳に達している。祖母は八十九、母は八十八まで長生した豊壽の血統である。先年埼玉縣鴻巣町に疎開中長壽者として今上陛下のお成りを奉迎申上げた節に、陛下は最長老の同翁の前で車より下り立たせられ親しく御慰問のお言葉を賜はつたそうである。これは同翁が老の眼をしばたきつゝ語る感激の第一話である。今だに視力、聽覺共に健全、殊に壯年を凌ぐ鑠髮振りと謂うべきである。近隣に住む七十四才翁の莊伊兵衛氏などは伴あつかいにされるといふ。かゝりつけの醫師は九十六才までの壽命を保證しているといふから愉快なはなしである。

11. 水害雑景

當町は荒川の岸にあり而も低濕地であるため永い間水害に苦しんだ。農村時代にも屢次の出水に米作を流失することが度重なり、被害の傷痕が恢復しないうちに更に災害を被ると云う状態であつた。

これによる疲弊のためか、明治四十年前後に於ても首縞の長絆纏にモジリ外套という姿態は、少々あらたまつた外出着であつた程儉ましい日常であつた。當時二重廻しや洋外套を着用する者は新興の會社に勤務する人たちだけだつたという。

最近になつてからも明治四十三年、大正二年、全六年、全九年の各水害の外に小さい出水に至つては枚擧に暇なきほどであつた。特に明治四十三年の大洪水には梶原の最高地点の福性寺も濁流が本堂の床に達したという。三部落中では梶原が最も頻繁に水害に襲はれ、郷戸、船方の人たちは梶原は蟹が泡を吹いても水が出るとか或は梶原人を水冠りなどと戯れて呼んだ。その後大正十二年荒川放水路が完成するに及んで郷土一帯は全く水害より解放された。

12. 雷神と落雷

白山神社の東側には昔から天祖神社、日枝神社などと並んで雷神を祭祠し、これを五社大神として崇拜した。この爲め當地には會つて落雷がないと云はれ、事実一回もこの事故はなかつた。その後明治三十二年頃になつて、當時現後藤半七氏宅の地に水車業を營んで居た石井清次郎氏が夏季の澗水期

に業務に差支えを生ずるところからその頃の動力の花形であつた蒸汽機関設置を計画し、故堀江榮太郎氏などと共に發企し株式會社組織を完了して、梶原に初めて高い煙突から煙を吐く近代工場が出現した。當時の郷土人は、煙を吐き轟音を發する株式會社工場の出現に驚異の目を瞠つたらしい。ところが或る大雷雨の日に此の煙突に避雷裝置がなかつたゝめに堀之内地區に前代未聞の落雷の棒事が勃發し、工場では怪我人を出す騒ぎだつた。郷土の男女はあんな煙突を樹てたので雷神の怒りにふれたのだと恐れたという。此の雷神は白山神社本殿東に今も五社神社として祭つてある。

六、郷土の生んだ文化

堀船は地域狭く且つは文化的に概して水準が低いと云はれていたが、実は現代文化への貢獻は尠くない。殊に此の小區域から二つの工業上の發明が發祥したことはまことに偉觀とすべきである。その一は寫眞植字機の發明と他は燃燒機關のそれである。これは向上を希つて止まない科學の頂点に於ける夢と、これを追求する不惜身命の強烈な意志の所産であつて、これを遂行した求道者たちに崇高な

畏敬を捧ぐべきである。戦後復興の目標を文化立国に目指す日本の進路はこゝに示されている。これら先覺者の遂げた偉業は青少年層の胸臆に絶えず希望の灯を点すると共に、未開の分野への勇往を鞭達するであろう。

1. 寫眞植字機の發明



石井茂吉氏

西紀十五世紀の中葉に獨逸で金屬活字母による活版印刷が發明されて以來、人類の意志思想の發表傳達は非常に便利になつて近代文明を生む推進力となつたと云はれるが、近代に及んでは更に高い能率と簡易な操作が要請されるようになって、科學の頂点に立つ一群の新進たちの間には無限の夢が展開した。同時に寫眞植字術の發達は是等の科學者の注目するところとなつて遂に寫眞植字機の發明となつた。これは大まかに云えば寫眞乾板上の字母を所望のままに光線によつて紙版上に植字するものであつて、從來の活字組版に比較して先づ鉛の活字が不要になつたことは勿論、一個の字

母から大小希望のまゝに植字し、鉛毒の恐れも無く更に工場施設量が少なくてすむという等々の点に於て正に印刷技術界に現はれた驚異の革命児であつた。此の結果辞典のような精密鮮明を要する印刷ははじめて會心の成果を擧げるに至つた。此の發明は昭和十八年迄堀船町一ノ五一六に研究所を持つて居た當地舊家出身である工學士石井茂吉氏が昭和二年略々完成されたものである。其の後昭和六年には恩賜賞金、全十四年には東日大毎の第一回印刷賞など、前後四回の光榮に輝いた不朽の業績であつて、本年四月には宮中にて藍綬褒章を拜受された。

2. 完全燃焼機の發明

古代の人類は自然發火の魔力的暴威を見て深く驚異したが、やがてこれを自家薬籠中のものとして自ら火を起すことに成功し、生活資具え火の加工を與えて日常生活を豊かにした。而も猶ほ火は眼に見えつゝ手に掴み得ない、譬えば陽炎のようなものである。人間の持つあらゆる創意を以てしても燃料から直ちに所望の熱度と量の火焰を起すことは至難であり、まことに意志を超越した變幻極り無い

存在である。現代の文明社會に於てさえ僻地のうす暗い土窯の前に隔む主婦も、蒸汽機關の前にスコップを揮う火夫も今だに扱ひ兼ねている難物である。

火食に初まつた人類の火の利用は現代文明に到達しながらも、更に明日の文化を生む爲めに如何に



水越勇次郎氏

して強い火を創造するかは大きな工業界の宿題となつて來た。加之燃料資源の節約と、粗悪燃料の活用という工業日本の宿命的な條件を充足する爲めにも、創意の燃焼機構が鋭意探求されるようになったが、此の研究は遂に半前爐式完全燃焼装置として結実した。これは多年の経験と独自の機構から完成したものであつて、低品位炭をも完全燃焼させ特殊な構造によつて熱量を極度に利用して燃料の節約と火力の高揚に至大の貢献を遂げたのである。本發明は堀船町一ノ一八一に工場を經營する水越勇次郎氏が海員時代の搖籃期の構想に多年刻苦の改良実験を加えて昭和十三年に略完成し廿四年專賣特許を得られたものである。降つて去る昭和廿五年四月には此の功勞によつて今上陛下に拜謁し藍綬褒章を拜受するの光榮に輝いた不滅の業蹟である。

(完)

堀船町一、二丁目居住者名簿

一丁目二三番地	大竹茂	水野昭	一丁目二五番地	中村時壽	佐藤兵衛	小池吉衛門	橋本勝利	橋本武	磯部武男	橋本完治	津田かつ	關口勝之助	田島藤三郎	田島四郎	宇津木武夫	伊藤勝藏	松橋要
一丁目三三番地	菊地正二	田中久江	大星忠治郎	細山三良	天野福三	高橋秀次	松本末吉	大塚次郎	細金弘	植竹のぶ	植竹汀	植竹信一	宇佐見友男	高橋晃夫	梅澤昇		
一丁目三七番地	加藤清	多賀昭司	大塚益藏	多賀きぬ	長島保夫	渡邊竹一	大瀧敬藏	佐藤吉次	小林智雄	小幡一武	小幡一郎	大島久清	大島晴雄	櫻井晨二	佐藤兵太郎	佐藤賢治	佐藤方

一丁目八〇番地	樋口秀夫	樋口清隆	林森之助	市川鹿之助	市川茂平次	吉田登	根本昇	三浦義美	小柳テル	高橋信次	渡邊喜久三	小林よね	一丁目八一番地	佐藤伊三郎	飯村定男	二葉庄藏	渡邊進平	加藤信一	
一丁目九三番地	高橋徳太郎	大森晴一	永井直行	松葉孝次	阿部勇太郎	塚田勝三郎	海老原孝三	吉澤マキ	松坂賢二	高橋一助	中野忠次郎	岩井正五郎	岩塚四郎	岩間保之	岡本豊富	石井幸三郎	關町俊也	青木一作	岩井方
一丁目九五番地	秋葉榮藏	鹿田定	一丁目九六番地	千葉襲治	千野一二三	今井正一郎	一丁目九九番地	堀田ハマ	一丁目一〇〇番地	沼田さだ	藤田七之助	石井英四郎	齋藤勝美	田中米造	一丁目一〇一番地	手塚忠夫	堀彦一	松浦康彦	

田畑龜藏	高橋富雄	中島初治	松本光一	中澤隆義	加藤すゑの	鹽原信次	栗原信次	佐々木金造	田中保吉	齋藤四郎吉	一丁目一〇七番地	下川龜吉	石井勝次郎	渡邊いち	一丁目一〇六番地	田村文男	大宮孝一	秋葉榮一	一丁目一〇二番地
------	------	------	------	------	-------	------	------	-------	------	-------	----------	------	-------	------	----------	------	------	------	----------

宮本龍太郎	小貫靖隆	武類忠治	下川岩吉	力丸四志	小林良典	石山友吉	笹崎貞	長谷川スエ	一丁目一二三番地	岩下コウ	山口磯治	岩倉松吉	山口岩吉	町田吉次郎	加藤邦彦	一丁目一〇番地	小金井春吉	鈴木四郎	小金井方	一丁目一〇九番地
-------	------	------	------	------	------	------	-----	-------	----------	------	------	------	------	-------	------	---------	-------	------	------	----------

野浦久二	板井清	一丁目二七番地	一丁目二五番地	一丁目二四番地	一丁目二四番地	鈴木清司	野澤正義	鈴木清司	北澤こう	一丁目二三番地	大池高橋啓一郎	大池幸一	堀越良典	杉田四郎	笹崎朝義	影山留吉	佐々木康子	加藤藤吉	宮本方
------	-----	---------	---------	---------	---------	------	------	------	------	---------	---------	------	------	------	------	------	-------	------	-----

福原方										一丁目二〇番地					茂木方			一丁目一九番地	
佐藤ふみ子	岩田武	安藤隆之助	大野静江	土屋貞臣	福原秀吉	小森義三郎	桑野道久	藤井京子	和田義晴	齋藤喜市	荒井善吉	鈴木政男	金子くめ	柳澤賢一	茂木高	島田實			
一丁目二八番地										一丁目二七番地					江川方			一丁目二五番地	
津田良雄	長島隆明	高野忠一	直道クシ	重田カクシ	吉田辰夫	村田嫌二	小室末治	岡本功司	小林酉藏	石垣カネ子	瀧澤繁夫	江川榮之助	櫻井平吉						
一丁目二九番地										佐藤方									
倉石數知	田地野正三郎	佐藤利夫	清水行雄	板倉重美	須藤與吉	早崎金藏	海老原博美	白岩敬次郎	小泉春子	大野直次郎	金子兵平	佐藤平三	金子眞子	佐藤愨哉	竹前富士夫	高木正之	篠原フサ	岡本潔	田山次郎

佐藤方										
石渡庄次	細井しず	高山秋三	一丁目一三三番地	菊川トヨ	宮崎傳吉	手塚謹次郎	渡邊康藏	蒔田公一	伊藤藤孝	一丁目一三一番地
石井邦之助	本間梅吉	高澤又五郎	一丁目一三〇番地	三森仲造	鈴木清	川島榮次郎	北村良忠	本間倉吉	佐藤方	
今屋源一										
豐田稔	柏原光雄	山本剛三	坂井源之丈	五味とみ	根岸一美	鈴村誠	吉田繁夫	瀨頭末	梅原洋一	一丁目一三四番地
小宮山嘉藤	佐藤義太郎	豐田喜惣次	小宮山嘉藤	佐藤義太郎	豐田喜惣次	今屋源一	今屋源一	今屋源一	今屋源一	小宮山方
勝亦義行	佐藤重春	佐藤重春	佐藤重春	佐藤重春	佐藤重春	佐藤重春	佐藤重春	佐藤重春	佐藤重春	小宮山方
小林きぬ	安田英男	安田英男	安田英男	安田英男	安田英男	安田英男	安田英男	安田英男	安田英男	小宮山方
豐田方										
高柳亮一	一丁目一四〇番地	荳野俊彦	深具正藏	常田稔	青木初太郎	勝又武雄	稻川保	一丁目一三九番地	關根孝治	內田方
飯沼政夫	飯沼政夫	飯沼政夫	飯沼政夫	飯沼政夫	飯沼政夫	飯沼政夫	飯沼政夫	飯沼政夫	飯沼政夫	內田方
室橋勝治	室橋勝治	室橋勝治	室橋勝治	室橋勝治	室橋勝治	室橋勝治	室橋勝治	室橋勝治	室橋勝治	內田方
高際寛	高際寛	高際寛	高際寛	高際寛	高際寛	高際寛	高際寛	高際寛	高際寛	內田方
小林理藤	小林理藤	小林理藤	小林理藤	小林理藤	小林理藤	小林理藤	小林理藤	小林理藤	小林理藤	內田方
坂井源吾	坂井源吾	坂井源吾	坂井源吾	坂井源吾	坂井源吾	坂井源吾	坂井源吾	坂井源吾	坂井源吾	內田方
內田祐司	內田祐司	內田祐司	內田祐司	內田祐司	內田祐司	內田祐司	內田祐司	內田祐司	內田祐司	內田方
吉田惣作	吉田惣作	吉田惣作	吉田惣作	吉田惣作	吉田惣作	吉田惣作	吉田惣作	吉田惣作	吉田惣作	內田方

新谷 曉	一丁目一四一番地	白木 功	森田 津子	野尻 庄次郎	白木 明	一丁目一四二番地	永井 與吉	黒田 春子	廣瀬 良平	一丁目一四六番地	砂岡 富美枝	向山 民次郎	一丁目一四七番地	梅田 節郎	一丁目一四八番地	榊田 屋園枝	北島 秀雄	畑中 孝造		
田口 平吉	市川 三郎	百瀬 ナカ	木内 茂	黒澤 孝治郎	一丁目一五〇番地	引馬 清	永井 初枝	小林 鈴江	穴戸 忠夫	諸川 守	大段 要之助	白木 馬之助	檜山 義龍	大内 敏藏	五味 春彦	榎本 ミヨ子	一丁目一五一番地	和田 禮子		
山家 久子	相澤 正平	吉田 義榮	長谷川 一	岩崎 セン	岩崎方	熊野 勇喜雄	河端 やす	猿橋 立男	樋口 安次郎	小橋 正吉	小橋 榮一	天野 房江	菊地 一虎	安彦 次郎	安彦 薫太郎	關 武雄	北川 久治郎	龜廣 茂	加藤 幸正	渡邊 幸七

一丁目一五七番地	中川重十郎	野島龜太郎	野島方	望月	金井	望月	初見正徳	松岡市藏	佐藤喜代子	吉池吉榮	永廣吉力	尾崎誠一	篠田甚五郎	榎本盛太郎	淺井幹久	濱野演吉	牧田平次郎	大木多美男	櫻本方	一丁目一五九番地	中島庄治
船見茂之	武村重三	石川賢司	荒川安信	赤羽根喜市	今野哲	永井勇二	新井善次	久保仲次郎	松澤都子	小泉一男	安原一男	森興作	文屋重	小田桐隆	荒井千代松	漂川兵吉	久保方	〃	一丁目一六〇番地	一丁目一六一番地	一丁目一六二番地
中澤友義	中澤きよ子	白田秀一	吉本文雄	平井三男	和田武志	竹内一義	篠田武夫	小宮正俊	佐藤すみ	菊地賢三	原武雄	小林眞二	富田正樹	白田方	中澤方	一丁目一六四番地	一丁目一六六番地	一丁目一七一番地	一丁目一七三番地	菊地方	

一丁目一七五番地	江原 己吉	一丁目一八一番地	飯田 卜夕	一丁目一八五番地	稻葉 利夫
一丁目一七六番地	坂元 富太郎	飯田方	増永 清三郎	一丁目一八六番地	吉田 作次
印刷寮	鈴木 武一郎	一丁目一八二番地	水越 勇次郎	吉田 十四三	
一丁目一七八番地	阿部 嘉男	酒井 勝次郎	岡安 榮二	一丁目一八九番地	高松 末吉
	柳澤 義知	岡安 哲郎	岡安 榮二	一丁目一九〇番地	吉田 富藏
	清川 重一	渡部 貞次	渡部 貞次	吉田 富藏	
	成瀬 聖一	山浦 武平	山浦 武平	畑野 一郎	
	平賀 清光	一丁目一八四番地	齋藤 龜壽	渡邊 福一郎	
平賀方	中村 敬太郎	齋藤 千代	齋藤 千代	一丁目一九四番地	高野 雄三郎
	平賀 武郎	阿部 千代	阿部 千代	一丁目一九五番地	
	平賀 武郎	草野 宗代	草野 宗代		
	鈴木 正三	鈴木 喜代	鈴木 喜代		
	伊藤 榮助	中村 喜代	中村 喜代		
	鈴木 勇	清水 静江	清水 静江		
一丁目一七九番地	佐山 久雄	高橋 要治	高橋 要治		
		齋藤 留吉	齋藤 留吉		
		小日向 寛	小日向 寛		
		相原 進一	相原 進一		
		舟山 長藏	舟山 長藏		

一丁目一九九番地	小林 安治	一丁目二〇六番地	關口 龜雄	一丁目二〇九番地	河西 源介
佐藤 慶一	一丁目二〇七番地	今井 百合子	一丁目二一一番地	佐藤 久	
西郷 昇一	水落 寅藏		上田 平次郎		
手島 高四郎	篠山 みわ		西川 源吉		
堂キミ子	市川 保三		菊田 勇		
荒川 貞之助	稻葉 芳次郎		片山 壽		
吉澤 喜次郎	市川方	名取 宣孝	山上 みち		
一丁目二〇一番地	小山 リキ	目黒 盛松	一丁目二一二番地	武藤 兼三郎	
小淵 正弘	一丁目二〇八番地	飯島 清司	一丁目二一四番地	谷口 昭次	
高木 良造	川崎方	川崎 定夫	一丁目二一五番地	鈴木 次郎吉	
鈴木 榮治郎	金子 正五郎	渡邊 實	成田 政治		
一丁目二〇二番地	北村 久松	金子 正三藏	横山 露一		
荒川 莊三郎	岩田 ユキ	鈴木 岩吉	小野 富子		
一丁目二〇四番地	藤澤 榮吉	海江田 明	片岡 豊二		
一丁目二〇五番地					

藤井方	藤井	若林	大野	黒澤	醍醐	添田	小沼	後藤	梶田	高橋	山下	深澤	北長	山下	北下	百瀬	島根	鹽野
定吉	吉夫	次夫	吉次	吉次	明吉	末吉	源七	勝秀	久行	力雄	義雄	純衛	長門	喜代	みつ子	盛登	照登	一郎
川野	松繩	淺利	鹽田	馬場	銀川	神林	神林	神林	吉坂	向井	常木	生川	清水	稻毛	佐治	鯨井	小林	渡邊
充吉	直吉	一郎	ハナ	正雄	重治	國平	孝嘉	一男	廣吉	廣吉	清吉	秀雄	三郎	甲治	フヨ	仙藏	貞吉	貞吉
一丁目二三番地	大野	齋藤	中川	齋藤	齋藤	小林	小田	前田	馬居	武田	渡井	遠藤	服部	相笠	加納	友治	友治	友治
作次郎	長太郎	午次郎	長太郎	長太郎	哲次郎	武太郎	武太郎	良信	利雄	ひさ子	遠次	酉藏	信吉	信吉	友治	友治	友治	友治

大嶽方	柿沼正勝	大嶽正勝	遠山孝雄	清水孝三	一丁目二三九番地 小熊信一	一丁目二三七番地 小熊清作	出雲養太郎	須藤禮作	戸室義一郎	一丁目二三六番地 石川きみ	鈴木壽郎	一丁目二三四番地 五淵與市	佐々木國松	伊藤茂一	田尻直江	中島喜吉
-----	------	------	------	------	------------------	------------------	-------	------	-------	------------------	------	------------------	-------	------	------	------

永井方	中根平之助	永井三男	伊藤藤太郎	一丁目二四七番地 長田守弘	田中博	大比賀正太郎	柳輝義	豐田仁造	高橋平三	小原ゆき	一丁目二四六番地 山口平次郎	小野クニ	荻野フシノ	梅木誠一	淺見市五郎	加藤讓	富澤キク	三輪文彌
-----	-------	------	-------	------------------	-----	--------	-----	------	------	------	-------------------	------	-------	------	-------	-----	------	------

一丁目二五一番地	赤川順一	青木乙松	上山弘	横倉大一郎	高野満	越前谷アイ子	近藤トキ	玉野淑子	一丁目二五〇番地 菅野正信	田卷熊助	一丁目二四九番地 上浦武男	風見新六	持田忠保	齋藤幸三郎	一丁目二四八番地	澁谷和子	畑岡ちか
----------	------	------	-----	-------	-----	--------	------	------	------------------	------	------------------	------	------	-------	----------	------	------

安井勝治郎	高松光義	小澤すい	熊谷兼太郎	一丁目二五八番地	天田雪江	上島一雄	平沼善雄	奈良繁雄	増田ハツ雄	住田義雄	瀧田得壽	山口恒雄	大里順也	長谷川松太郎	菅生村タケ	菅生貞仁	柴田とら	井川照子	澁谷寛二
市村榮治	田崎シチ	石井與五郎	松村好藏	一丁目二六八番地	井栢理助	諏訪山一郎	猪俣	丸山正仁	堀江友吉	田村順休	竹内新太郎	杉山武助	横澤熊次	諏訪山サク	山本國男	吉野正巳	秋元謙太郎		
林政治	手塚與平	一丁目三〇三番地	諏訪志づ	大東燃料	田久保周譽	一丁目二八五番地	吉澤義太郎	一丁目二七六番地	松島元信	木村義正	中島金之輔	中島一郎	小田桐すわ	野澤辰造	伊藤篤	天沼雪江	横田惣吉	楠田勇	一丁目二七一番地

大東燃料	佐藤	小野澤	野城	竹田	鹽浦	山岸	關	鈴木	荒川	竹堤	山本	庄司	華山	新海	佐藤	荒川	大竹	眞瀬
	辰五郎	才治	勝彦	泉一	里司	軍治		正男	正美	花子	キヌ	次郎	ヨ子	と代	千之助	庄八	和子	英雄
	深田	竹田	柴崎	隅内	北井	本橋	佐藤	吉川	石井	石井	三浦	佐藤	二見	小曾	北井	山田	森川	
	五兵衛	治康	寛幸	清	勝四郎	孝藏	庄司	末衛男	井衛門	井清	子之助	マツ	春雄	根セン	清太郎	文雄	直造	
	石島	龜瀧	田口	白井	田中	龜瀧	井上	井上	湯澤	佐藤	庭長	柳澤	石井	小泉	小泉	新井	石川	今田
	榮太郎	静子	包次郎	誠一	喜久雄	穂之助	善八	善八	惣吉	ヨシ	長治	茂二	銀次郎	忠次郎	彦七	庄吾	齊一	方

今田方	研石留藏	今田泰次郎	今田方	石坂則保	渡邊由次郎	立木秋藏	一丁目三三八番地	長田美喜男	荒井清治	一丁目三四二番地	安藤龜市	一丁目三四六番地	澤栗吾郎	秋元由藏	小林靜夫	北島春雄	志田春江	一丁目三四九番地	小林精一郎	堀口米作	河根春治
一丁目三五〇番地	水野政一	安藤正夫	安藤方	小林勝治	江森松次郎	若林孝次郎	水越普一郎	飯塚利一郎	内山勇藏	一丁目三六二番地	小林をかづ	小林木一郎	野田高光	野田友三	後藤浩	荒川正一	岡田眞市	西村武子	佐藤寅藏	奈良毅	
佐藤方	佐藤タキ	上野三代之助	屋照代	猪岐まさ	瀧澤尙男	内田龜太郎	荒川正一方	塚越敏理	野政一	折原均一	竹内平太郎	松田豊春	大平文吉	伊澤宗一	一丁目三六四番地	沼崎太吉	小森はる	荒川住夫	荒川あい子	一丁目三七〇番地	池田桃右衛門

岩田方	岩田久仁治	赤松文平	川田好	白石佐平	高里良英	小林初造	須貝善吉	小泉廣吉	宮本常男	赤羽根武	渡邊福三郎	石田與八	榮清市	一丁目三七三番地	坂上保	鈴木喜三郎	一丁目三七二番地
寶酒造社宅																	
清水建設作樂所	鹽島繁次	佐藤製衡所 吉村孟	龜山庫治	一丁目四二六番地 高橋明	今井喜久次	關三子雄	一丁目四一一番地 後藤半七	鏗山久好	三原滿方 三佐和ッネ	一丁目四一〇番地	三原滿	三原	一丁目四〇一番地 鏗峨治	鈴木信吉	湯田安雄	三俣金次	
佐藤製衡所	市川只男	瀧村義章	瀧村保登	一丁目四五二番地 坂本方 成田元安	堀口三造	坂本昇	一丁目四五一番地 野本運司	齋藤	齋藤	木滑長松	井出喜久次	古川三二	佐藤方 藤田辰男	關口芳夫	白樂喜三郎	遠藤芳夫	柴崎胤治

赤間義治	澁谷一郎	深瀬正一	石井恒	加藤吉三郎	田中寅吉	佐々木勇太郎	福田善二	野本清次郎	齋藤みよ	杉田三四郎	山崎隆	小林丈助	仙石敏男	齋藤隆次	増田政次	天野梅壽	一丁目五四八番地	谷口忠義	谷口忠義
高松方	古村保雄	原田智一	一丁目五八五番地 關つね子	一丁目五八四番地 高松ふじ	品田方 一丁目五八三番地 高松ふじ	品田方 一丁目五八三番地 高松ふじ	荒川方 清水八恵子	荒川方 清水八恵子	荒川方 清水八恵子	大畑久雄	馬場悦子	一丁目五八二番地 山田金逸	一丁目五七五番地 望月信雄	安田喜一	上野國藏				
矢内廣衛	陣内善雄	杉山善雄	田中登喜夫	柳田利雄	長山演	杉山新平	棚部庄八郎	菅原冬子	一丁目五八八番地 菅原冬子	齋藤方 一丁目五八八番地 福原宏	齋藤イネ	土信田通治	遠藤養治	熱田安之助	白井靖子	關武	遠藤あさ		

一丁目五九一番地	宇田川國三郎	印刷廳寮	水野弘之	印刷廳寮	桑原伸枝
山田清八	新部助次郎	印刷廳寮	澤田喜一	〃	〃
一丁目六〇九番地	石橋義策	印刷廳寮	池田實	〃	〃
酒井メノ	菊地信郎	印刷廳寮	彌崎	〃	〃
飯面誠一	堀井芳雄	印刷廳寮	本多正智	〃	〃
高山二男	細淵龍吉	印刷廳寮	小泉文代	〃	〃
一丁目六二二番地	伊藤秀夫	印刷廳寮	佐藤留藏	〃	〃
小林好一	三宅春造	印刷廳寮	片桐勳	〃	〃
一丁目六二三番地	小野勇吉	印刷廳寮	東京鑄造社宅金子正隆	〃	〃
印刷廳寮	柳田吉松	印刷廳寮	天野安敏	〃	〃
松村良行	富田新一	印刷廳寮	竹内德三郎	〃	〃
〃	本多正人	印刷廳寮	山田外郎	〃	〃
〃	南口重幸	印刷廳寮	唐澤	〃	〃
〃	篠崎俊男	印刷廳寮	糸村昌明	〃	〃
〃	鈴木長吉	印刷廳寮	田中きみ夫	〃	〃
〃	恩田武衛	印刷廳寮	竹田和夫	〃	〃
〃	久保田清一郎	印刷廳寮	日本專賣公社機械製作所	〃	〃
〃	高田英次郎	印刷廳寮	平澤	〃	〃
〃	櫻井兼雄	印刷廳寮	奥野友之	〃	〃
〃	大塚保治	印刷廳寮	〃	〃	〃
〃	横山章三	印刷廳寮	〃	〃	〃
〃	大井鍵三	印刷廳寮	〃	〃	〃
〃	猪瀬幸作	印刷廳寮	〃	〃	〃
〃	石田正美	印刷廳寮	〃	〃	〃
〃	海谷二朗	印刷廳寮	〃	〃	〃
〃	上田武男	印刷廳寮	〃	〃	〃
〃	松村良行	印刷廳寮	〃	〃	〃

鈴木誠進方	鈴木誠進	田中勇	飯塚盛次	飯塚盛次	杉山俊	玉山勇	石田清	榊榮三郎	堀江重三郎	佐藤吉治	青木賢二	石井榮一	内藤菊二	關口操
一丁目六七七番地	一丁目六八二番地	一丁目六八四番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地	一丁目六八二番地
第二製パン所鈴木敬一	福井安一郎	中村志夫	梅原順藏	前川政次	戸川正雄	櫛田徳治	片柳貞男	淺子源造	大瀧武仁	本間秀雄	染谷吉一	高橋金一郎	前田安正	齋藤八郎
一丁目六七八番地	一丁目六九〇番地	一丁目七〇六番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地	一丁目七〇七番地
岩間政雄	畑山兼松	大川正一	石井禮壽	星三重	深澤皓	鹽澤勝士	芝浦工業工場内	山根伊三吉	中村馬五郎	山根義孝	白井初太郎	天野信吉	矢鳥唯雄	木澤さだ子

佐竹只吉	齋藤隆之	楓澄雄	白井清治	石井キク	鹿島治作	渡邊善二郎	高橋兼吉	額浩	一丁目七四〇番地 清水龜太郎	一丁目七四一番地 阿部太市	高木秀二	一丁目七五〇番地 榎本喜平	一丁目七五五番地 龜井丑一	元地富治	田口金造		
一丁目七六〇番地 室井清	松橋直吉	松橋鐵郎	奥山泰五郎	菅原松壽郎	原仙太郎	内田雅章	原武雄	石井弘一	大塚松太郎	海沼佐次郎	倉本健治	一丁目七六八番地 林ちよ	平野信二	森川信一	杉山すみ江	五十嵐幸吉	橋本源吉
坂三千三	一丁目七八五番地 長谷川四郎	牛川正一	川崎新介	一丁目七八八番地 三浦次雄	一丁目七九九番地 今井壽太郎	岩田きよ	石川章太郎	一丁目八〇〇番地 文屋佐太郎	島田庄太郎	文屋方 大森徳一	日本鑿泉 内藤三三	富澤金藏	一丁目八〇六番地 俾山定一	橋爪正儀			

東書寮	見富肇	島田元吉	加藤朝雄	栗本正勝	小金井道夫	山口シズ	渡邊昭三	東書寮	荒川豊吉	金子源太郎	野崎友俊	印出輝子	熊倉代三郎	龜田榮吉	里見とら	泰樂唐男	鈴木謙次	戸田宗一	那須榮助	
			廣岡方				一丁目八三七番地		一丁目八三一番地						一丁目八二八番地					
	早川曉	今野勇	廣岡幸治	廣岡政吉	田本彌治郎	須藤賢一	高橋茂雄		梅澤宏	信田松太郎	石津政藏	大島宗太郎	飯久保榮一	岡崎俊	白倉一也	川上太一	石川虎雄	栗本清		
			一丁目八八七番地				一丁目八七八番地			一丁目八七〇番地		一丁目八五八番地	一丁目八五二番地							
	西村義雄	明石保太郎		平山義範	澤田利藏	五十嵐茂		半田貞三郎	川島保治	田中作馬	木下一雄	品田德太郎		榎戸愛子	篠塚春藏	井上孝吉	飯塚時三郎	齋藤清		

一丁目八八八番地	板橋常藏	宮崎一郎	薑手仁一郎
飯塚佐平次	坪井勝重	立花德幸	薑手春巳
藤白金太郎	武田榮	森田九兵衛	飯島一郎
市川薫	佐々田方	佐久間留治	一丁目九〇二番地 秋元美代四郎
一丁目八九〇番地	川上末次	山田喜久夫	一丁目九〇五番地 江原方 齋藤敬太郎
鈴木勝泰	山田方	久保田脩男	〃 海藤一十郎
長谷川糾	一丁目八九五番地	堀江清勝	飯島一十郎
磯田陽	堀江方	堀江富雄	横山喜太郎
横井川富藏	一丁目八九八番地	生澤安吉	横山八郎
渡邊俊夫	金子方	金子又五郎	及川泰
東書寮	福山伸治	金子方	佐藤セツ
一丁目八九一番地	寺下松壽	中川トヨ	成田八十吉
一丁目八九二番地	若山由藏	一丁目九〇〇番地 倉田林平	止部勇
小宮登利藏	增山淺一	龜山竹信	一丁目九〇六番地 風間吉太郎
一丁目八九三番地	市川久子	坂木次雄	野中清志
			後藤隆一

中村仙太郎	高野巳三郎	定方七郎	高野亮	田中北男	高橋竹藏	北村欽子	佐納光子	北村方	一丁目九一〇番地	小田垣東作	小柳勝治	山口庄助	堀江定都	一丁目九〇八番地	高橋文治	杉田テイ	松本千代松	中村留吉	吉原幸二	
		一丁目九一五番地	熊倉政雄	小林又吉	大澤留吉	熊倉武	高木正吉	青田澄人	牧田定右衛門	土方敏男	小俣光三	鳥居春市	一丁目九一四番地	服部久作	田口ハナ	岩崎國太郎	田口輝藏	中村清	中村方	
三浦方	馬場誠一郎	栗原猪太郎	近澤郁郎	三浦郁郎	田上茂	一丁目九一七番地	宮崎方	齋藤新次郎	里島寅吉	佐久間又一	淺香龜吉	鬼頭繁男	河野克己	石坂源藏	勝沼藤助	清宮義昭	江原良助	增田政治	一丁目九一六番地	
河川定雄																				

一丁目九二八番地																			
阿部	阿部	松永	浅見	小澤	中村	板垣	宮崎	青柳	石毛	池内	根木	鈴木	石川	邊見	茅野	増田			
和	部	浪	見	澤	村	垣	崎	柳	毛	内	木	木	川	見	野	田			
三	部	次	な	健	け	三	春	文		之	五	ひ	カ	巳	止	辰			
郎	三	郎	か	二	い	郎	吉	衛	延	助	郎	さ	イ	次	也	造			
一丁目九二四番地										一丁目九二〇番地									
和田方										一丁目九二六番地									
明石										嶋倉									
和										西									
安										外									
林										外									
志										外									
村										谷									
睦										孝									
夫										一									
次										郎									
郎										男									
雄										治									
三										吉									
夫										命									
次										次									
郎										郎									
三										勝									
夫										吉									
次										登									
郎										ナ									
三										ミ									
夫										七									
次										郎									
郎										一									
雄										徳									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									
次										一									
郎										一									
雄										一									
三										一									
夫										一									

一丁目九六九番地

小宮山生長

一丁目九七一番地

出口源

一丁目九七二番地

高橋徳三郎

出口方

永島イウ

一丁目九七三番地

櫻本武雄

須賀ひさ

高橋元久

山同武雄

一丁目九八七番地

遠田豊作

一丁目八一番地

伊藤一郎

一丁目一六六番地

竹内敏雄

堀船町二丁目

二丁目一番地

櫻井仙吉

二丁目二番地

定村政一

田畑孝治

二丁目三番地

逆井徳次

小宮柳藏

小宮善之助

二丁目五番地

佐々木巳之藏

島田太作

園部はる

島田正夫

二丁目七番地

中村小静

竹内光子

池谷秀雄

柴澤智子

二丁目一〇番地

逆瀬川盛章

杉村初年

廣居半一

松島保

二丁目一〇番地

石神新吉

二丁目一二四番地

高安郡司

二丁目一三三番地

石神榮藏

石神勇藏

二丁目一三三番地

平田重次

石神武夫

二丁目一三九番地

坂本久三郎

坂本方大谷國藏

二丁目一四〇番地

藤沼一雄

島上並松東操和武小大土水大鹽山内大今藤大
 村條木本方木田林森屋村津原根田島井崎内
 三近邦キ治一繁一外正武茂清俊能
 す次郎雄夫チ吉誠三之吉清敏史子次英一夫
 貢一々郎

並佐小鈴峯金水萩阿鈴山本吉西志奥神飯
 木藤倉木村安本原部木田多田山村出尾塚
 兼ミ一勝三ゼ次定久喜三勇亮直良於洋
 吉ツ郎惠玄清ン郎利柄郎三保一孝子治子

祝堀船郷土史刊行

北區長 高木惣市

東京都議會議員

富田直之

北區神谷町二丁目八三番地
電話赤羽(80)四四八四番

王子運送株式會社

取締役社長 濱野清吾

北區神谷町二丁目一一三番地
電話赤羽(80)三四〇一番
三六四〇番・三九〇一番

齒科一般

默堂青山政行

北區堀船町一丁目七三番地
電話王子(81)五二九七番

北區議會議員

水野新治

北區堀船町一丁目四十二番地
電話王子(81)二九六二番

富士屋酒店主

梶原銀座通商店會々長

小宮山嘉藏

北區堀船町一丁目一三三番地
電話王子(81)四〇九五番

銅
鐵
商

和
田
武
志

北區堀船町一丁目一六二番地
電話王子(81)三〇二六三八番

銅 鐵、 機 械
非 鐵 金 屬、 材 料

平 井 商 店
平 井 三 男

北區堀船町一丁目一六二番地
電話王子(81)三五四〇番

寶 燒 酎
 寶 味 淋
 寶 本 直 し
 寶 新 清 酒
 清 酒 松 竹 梅
 オールド ウイスキー
 アイデアル
 寶ポートワイン

東京都北区堀船町一丁目三九二番地

寶酒造株式會社王子工場

工場長 宮本常男

電話王子 (81)

二四四四
 二六五五
 六五六六
 一二四三
 番番番番

小學校、中學校用檢定教科書
全 文部省著作教科書

發行

東京書籍株式會社

取締役社長 山田三郎太

東京都北區堀船町一ノ八五七

電話王子(81)

三一四〇・三〇八〇・四六四六
三一五三―三一五五
二四九二・四四四七(編集部直通)

南國船舶株式會社 東京造船所

常務取締役 井手錦之助 所長

北區堀船町二丁目一六〇番地

電話 王子

(81)

三三三三
九九九九
一一一一
四三二一
番番番番

內科・外科

鹿田醫院
鹿田定

北區堀船町一丁目九五番地
電話王子(81)五二二一八番

經

株式會社

堀江味噌釀造所
專務取締役堀江善右衛門

北區堀船町一丁目九四三番地

電話王子

(81)

三二二〇二八番
三二二二二六番
三二二七三番

專賣特許 水越式完全燃燒裝置

(本發明により藍綬褒章下賜)

水越燃燒工業株式會社

社長 水越 勇次郎

北區堀船町一丁目一八一番地
電話王子(81)三三〇二八五番

各種木材、建築用材

高橋材木店

高橋要治

北區堀船町一丁目一八四番地
電話王子(81)三八四九番

健康保險醫

三堀齒科醫院

三堀健次

北區西ヶ原町一四七五番地

製鋼原料一般

銅鐵商村田嫌二

北区堀船町一丁目一二七番地

土砂・砂利・採集
セメント・土管・割栗
建築材料問屋
(各工場納め)

問 矢 新 市

北區堀船町一丁目四六三番地
電話王子(81)二四二七番

塗料・染料・顔料・藥品

大進塗料株式會社

社長 政所 幸次郎

北區堀船町一丁目九二五番地
電話 王子 (81) 三三四〇五番
四一八二番

製鐵原料、銅鐵機械、鑄物其他

株式會社

吉田商會

社長 吉田作次

北區堀船町一丁目一八六番地
電話王子(81)四四〇四三番
四四五三一番

東京都御用
一般建築・請負

小日向建設工業株式會社
取締役社長 小日向 寬

北區堀船町一丁目九五一番地
電話王子 (81) 二二七五番
二二七五番
四七七五番
二番

營業案内

銅・真鍮・鉛・亞鉛屑・其ノ他輕金屬屑
一般非鐵金屬屑買受並ニ販賣
伸銅製品 板・管・棒 販賣

株式會社東洋伸銅所指定納入代行店

地銅問屋

株式會社

和田商店

取締役社長 和田 實

北區堀船町一丁目九三九番地
電話王子(81)五二一五番

各種ゴム印製造

原ゴム印製造所

原 武 雄

北區堀船町一丁目七六〇番地
電話王子(81)四六七五番

石神家の家系(寫)

清和天皇の孫、貞純親王より七代を経て石神土佐守信秀、文明三年當地に來住して一家を創立す。

一代	石神土佐守信秀	十代	石神久兵衛
二代	同 因幡守重俊	十一代	同 吉兵衛
三代	同 藏人	十二代	同 久兵衛
四代	同 左衛門信義	十三代	同 勘兵衛
五代	同 久兵衛信茂	十四代	同 源兵衛
六代	同 勘兵衛	十五代	同 與
七代	同 勘兵衛	十六代	同 與
八代	同 勘兵衛	十七代	同 與
九代	同 久兵衛	十八代	同 與

十九代は當主

石神徳太郎相續す

以上 石神家

伊藤吳服店

伊藤銀一郎

梶原銀座通り

入院設備完成

飯田助産院

助産婦 飯田とく

北区堀船町一丁目一八一番地
電話王子(81)四七四六番

御客様本位の
親切な店



質店

石井與五郎

北区堀船町一丁目二六七番地
電話王子(81)二五二五番

堀船で一番勉強するので評判の
洋品・雑貨何でも揃ふ

青木洋品店

店主 青木初太郎

梶原銀座通り

糸類、綿、フトン、蚊帳
毛糸、洋装、雑貨

白木糸綿店
白木馬之助

営業所 堀船町一丁目一五〇番地
(梶原銀座通り)
工場 堀船町二丁目一八六番地

染物洗い張
練拔専門部



鵜澤耕一

北区堀船町一丁目一五番地
(梶原交番裏)

生めん、ゆでめん、
中華そば

長谷川製麵所

北區生麵工業協同組合
王子支部長

長谷川一

北区堀船町一丁目一五〇番地
(梶原銀座通り)

牛豚精肉

ハム・ソーセージ
カツレツ・コロツケ
お惣菜もの

二葉精肉店

二葉庄藏

梶原銀座通り

鰹節。乾海苔。漬物
海産物。罐詰類。食料品一般



中村屋食料品店

加藤末一

堀船町梶原銀座通り

酒類、味噌、醬油
罐詰類、食料品

升本屋酒店

横澤熊次

北區堀船町一丁目二六〇番地
電話王子(81)三六八六番

溫泉旅館

梶原旅館

飯村定男

堀船町一丁目八一番地

うまいやすい



味噌 醤油 砂糖
罐詰 石鹼 調味料

は是非當店へ……

寶酒造通り

伊勢末酒店

河根春治

電話王子(81)三三三五番

洋服、洋品一般
仕立直賣

林洋服店

林森之助

堀船町一丁目梶原銀座通り角
電話王子(81)四八七二番

堀船郷土史の
発行を祝す

堀船小學校PTA

校長 手塚喜四郎

會長 田中芳枝

副會長 石井與五郎

會計 村田嫌二

書記 清水喜造

米 穀・薪 炭・精 米
(梶 原 屋)

脇 野 商 店

脇 野 正 治

梶原電停際・電車通り
電話王子(81) 5376番

時 計 と 眼 鏡

小 泉 時 計 店

北 区 堀 船 町 1 ~ 7 9
(梶 原 銀 座 通 り)

處方調劑・化粧品・賣藥一般

三 王 堂 藥 局

根 本 昇

北 区 堀 船 町 1 ~ 8 0

電 話 王 子 (81) 5 3 6 1 番

東 京 都 公 認 建 築 請 負 業

住 宅 金 融 公 庫 の 御 用 も 御 相 談 に 應 じ ま す

石 井 英 四 郎

堀船町1丁目100番地（梶原銀通中央）

各 種

ク リ ー ニ ン グ



洗 い 張 り

せ ん た く

丸 正 洗 染 株 式 會 社

篠 田 武 夫

營 業 所 北 区 堀 船 町 1 ~ 1 6 2

出 張 所 北 区 豊 島 8 ~ 1 7

常に良い品を
風桶 呂類 製造販賣
修繕も致します
(梶原の桶や)
安原才次郎

北区堀船町1~160

處方調剤・賣藥・化粧品

中澤藥局

中澤友義

北区堀船町梶原銀座通り
電話王子(81)4604番

藁工品・製紙原料
壁材各種つた製造・木箱製造

竹内商店

竹内一義

北区堀船町1~162
電話王子(81)2592番

キャンデー・アイスクリーム・製造卸小賣

「そば部新設」味がよいので大好評

餅菓子・和菓子・ちんもち

伊勢や 北 む ら

北 村 久 松

北区堀船町一丁目二〇〇番地

紳 士 服 御 仕 立

清 川 洋 服 店

清 川 義 幸

梶原銀座通り（小泉時計店わき）

慶弔造花。神佛葬祭具。諸式場内外装飾

御貸衣裳・黒ムク・羽織袴・モーニング式服御用達

東京都都民葬儀指定取扱店

都 北 葬 祭 株 式 會 社

梶原承り所 竹 内 鐵 雄

梶原電停ソバ 電話王子(81)4751

機 械 と 工 具

機械工具・傳動機・ボールトリベツト
度量衡計量器・パイプ・鐵管継手

株式會社 小 宮 商 店

北 区 王 子 5 の 2
電 話 王 子 (81) 3 4 5 3 ・ 2 4 3 0

株式會社 坂 本 鍛 工 所

代表取締役 坂 本 虎 男

北 区 堀 船 町 一 丁 目 四 五 二 番 地
電 話 王 子 (81) 4 2 0 6 番

木 箱 。 荷 造 箱 。 製 造

吉 田 木 材 木 箱 工 業 所

吉 田 清

北 区 堀 船 町 一 丁 目 六 九 番 地

内科。産婦人科

池田醫院

池田桃右衛門

北区堀船町一丁目三七〇番地
電話王子(81)二三七三番

北區結婚相談所

所長 村井 邦

北区岸町一ノ五北区立王子圖書館内
電話王子(81)四〇二一番

齒科 一般

山本齒科醫院

山本順造

北区王子町一三五五番地
(地)藏尊ヲキ
電話王子(81)三〇七三番

午前宅診・午後往診

助産婦 亀廣壽世

北区堀船町一丁目一五一番地
電話王子(81)五三七三番

王子保安協會常任理事
王子保安協會防犯副部長
民生委員・兒童福祉委員

堀江定都

北区堀船町一丁目九〇八番地

酒類・味噌・醬油・罐詰類
其他調味料一式



大島酒店

大島大三郎

北区堀船町一ノ七二六
電話王子(81)四七四二番

創立大正八年
セルロイド生地製造用諸機械製作

平山製作所

平山義範

北区堀船町一丁目八七八番地
電話王子(81)二五一二番

諸機械製作並修理
各種齒車齒切加工

北井鐵工所

北井清太郎

北区堀船町一丁目三一七番地
電話王子(81)四七三七番

自動車用タイヤ。チューブ
再生修繕。附屬品一式販賣

關口タイヤ商會

關 口 龜 雄

北区堀船町一丁目二〇五番地
電話王子(81)四一五〇番

電機通信機資材各種

隻手政次郎

北区堀船町一丁目九〇〇番地
電話王子(81)三七八六番

諸建築請負業

篠田甚五郎

北区堀船町一丁目一五八番地

特に金融公庫利用の方は手續其他代行
等御便利に親切第一にお扱い申上ます
諸建築請負業

河合竹三郎

北区堀船町二丁目一七六番地

毎度有難とう存じます

◇いつも勉強して

御客様に愛される店◇

書籍、雑誌
教育玩具
三、五雛人形

栗原商店

梶原銀座通り

日用雑貨、荒物
食用油「豊年」

秋葉商店

秋葉榮藏

北区堀船町一丁目九四番地
(梶原銀座通り)

児童福祉法による認可施設

木の実保育園

北区堀船町一丁目二五一番地

青果物各種

安八百屋

武田利雄

北区堀船町一丁目二二八番地

千代田式編物器械格別に
お取次いたします

婦人子供服御仕立(洋裁部)

毛糸編物教授。編物の事なら何でも御引受けいたします。

秋に入ると多忙になりますから夏中に冬の御支度をおすゝめ申上ります。

天野編物教授所

北区堀船町一丁目一五一

各種ポール箱製作

紙器
紙工品
箱押

高野紙器工業所

北区堀船町一ノ九一〇

高野巳三郎

きそば、天ぷら

砂場そば店

高橋一助

北区堀船町一丁目九四番地

薪炭卸問屋

秋田屋商店

小林哲次郎

北区堀船町一丁目二六二番地
電話王子(81)二二八〇番

銅 鐵 商

株式會社 富正商店

取締役社長 澤井正富

北区堀船町一丁目七九八番地
電話王子(81)二六〇九番

電氣・酸素・熔接・鐵工一般
化學應用器械製作

(舊渡部熔斷工業所)

新光鐵工株式會社

代表 渡部 貞次

北区堀船町一丁目一八二番地

諸建築請負

建築業 渡邊幸七

北区堀船町一丁目一五一番地

內藤製函所

內藤力松

北区西ヶ原町一四六〇番地
電話王子(81)四〇一九番

名入番傘製造卸代理店

ウチワ・扇子・カレンダー

サーピス宜傳用マツチ

店主 堀口米作

堀船町一丁目三四九

(多少に拘らず御用命下さいませ)
(御通知次第見本をお目にかけます)

電気 熔接
酸素 熔接
自動車修理
鐵骨製罐
パイプ排罐工事
出張請負

清水建設株式會社
協和工業所

谷口兄弟工業所

谷口 昇

谷口 忠義

北区堀船町一丁目五二九番地
(寶酒造會社王子工場正門前)
電王(81)四五六四呼(寶酒造)

土木 建築 請負

附帶工事一式

東京東北電氣工事工業協同組合員

有限

吉田木材工業所

吉田 秀治

北区上中里町三七一番地
電話王子(81)四八四六番

各種燃料商 新谷堯商店

堀船町一丁目一四〇番地

◇出前迅速◇

味の 花 ず し

是非御用命下さい

堀船町一ノ九三

何時もニコニコ勉強の店

養生堂チエーン・ストア

化粧品 専門の店 吉田化粧品店

小間物 梶原銀座通り(地藏尊隣)

電気工事一般・ラジオ月賤販賣

東京電機商會

渡邊進平

梶原銀座通り

パーマメント

カスガ美容室

堀船町一丁目七九番地

疊床ハ責任アル自家製疊機ニテ御獎メ

上敷ゴザ

一式請負

濱野疊店

北區堀船町一丁目一五八番地

文房具。日用品。雜貨

三笠堂 相笠文具店

堀船町一丁目二三〇番地

アイスクリーム・アイスキャンデー
冬は中華そば・ワンタン・和洋菓子

のんき 店主 戸田宗一

堀船町一ノ八〇六 電話王子(81)五二五七番

寫眞の御用は是非當館へ!

(出張撮影も早速お伺いいたします)

渡邊寫眞館 渡邊林之助

王子町一ノ一四(電車通り石井薬局横)

坂本タバコ店

坂本久三郎

堀船町二丁目一三九番地

つくだに
菓子類

廣瀬良祐

堀船町二丁目一八五番地

東京北區堀船町一ノ九一四

東京細巾染色株式會社

電話王子(81)四八七三番

御調髪は親切・勉強・技術優秀な

高橋理髮店

高橋福三郎

堀船町一丁目九三番地

北區堀船町一丁目七二七

旭光商事株式會社

電話王子(81)二二八一番

生菓子と干菓子

都王菓子店

倉橋保太郎

上中里町三八七番地

諸機械部品工作
果實保護袋用
止金及磁石
製造販賣

小林製作所

堀船町一丁目一七一番地
(梶原電停前)

壁一式請負

左官職石川賢司

堀船町一丁目一五九番地

竹材一式・丸太

竹宗牛川竹店

牛川正一

堀船町一ノ七八五 電話王子(81)二九二八

金屬型彫刻 檜山義龍

堀船町一丁目一五〇番地
(梶原銀座通り)

建具各種製造

白田秀一

北区堀船町一丁目一六二番地

和洋紙工用品
紙工用品
文房用具
事務用品

ふじや文具店

北区堀船町一の二二〇番地
(梶原銀座突當り)

各種鍍金・金屬着色

東邦電鍍工業所

須藤賢一

堀船町一丁目八三七番地

男女くつ販賣修繕

市川靴店

市川鹿之助
梶原銀座通り

家具製造 向山民次郎

堀船町一丁目一四六番地

乾海苔問屋



田中商店

堀船町一丁目二六〇番地
電話王子(81)四八一一番

上田屋精肉店

梶原銀座通り突當り

趣味と教養の會 あけぼの文化サークル開設

顧問 學藝大學々長 木下一雄先生
顧問 高木惣市先生
全 歌人 中河幹子先生
全 木村萬春先生
全 吉田キク先生

同人 山本ふじ
全 大竹管子
全 水越たけ
全 牧田八千代

一、本會の精神

會員相互の教養を高め文化の振興と親和向上をモツトとして、平和國家建設に邁進いたしましょう。

どなたも御気軽に御入會下さい。又同好の方々の温習や、奥様の憩の場とも致し度いと存じますので、各層の皆様方が御心やすく此の「あけぼの文化サークル」に御入會御利用下さい。

二、課目並に担当教師

俳句 鼎吟 吉田 運川先生
箏曲 山田流 塩見 春能先生
茶道 月田派 阿部 桂月先生
舞踊 藤間流 藤間 幸榮先生
小唄 田村 万代先生
短歌 歌人 山川 京子先生
謡曲 觀世流 水野 洋三先生
華道 古流 鈴木 木理先生

◎其の他手藝(編物・日本人形)等も逐次開講予定

三、教場 王子圖書館内(北區岸町)

小唄教場 梶原銀座通り中澤喫茶店方
自午後四時 至午後十時 (但月曜、金曜)

四、教授料

◎五人以上團體申込に特典あり
各科金參百元(週一回)
入會金貳百元(週二回)
入會金貳百元(各科共通)

五、申込所

入會規定其の他の御問合せは本會事務所 王子町一三五番地(電話(81)三〇七三番山本ふじ)
◎随時入會申込を受付けます

曜	課	目	時	間
土	舞	踊	午後二時	八時
日	舞	踊	午後三時	八時
月	舞	踊	午後二時	八時
火	舞	踊	午後三時	八時
水	舞	踊	午後一時半	四時半
木	舞	踊	午後二時	八時
金	舞	踊	午後三時	八時
土	舞	踊	午後二時	八時

◎御申込は 左記で受付けます。

北區王子町一三五番地 電話王子(81)三〇七三番
山本齒科醫院内 山本ふじ

青物・果實

荒井千代松

梶原銀座通り

中澤喫茶店

小林よね
梶原銀座通り入口

壽司と御料理

壽司勝

上中里三九七
電話三八五九番

大黒様をお祭りする會

福神會 (牧田方)

堀船町一ノ一五八
電話王子(81)二八四五

化粧品・小間物・雜貨の

御用命は

親切と勉強の店

ゆたかや化粧品店

店主 望月 武

堀船町一丁目一五七番地
(梶原銀座通り入口)

編集後記

財産があり、ひまがあつたら、こんなことをやるのも、わけのない仕事ですが、金もなし、ひまもない貧乏人の我々が、こんな事を計畫する事が、おこの沙汰ながら、町の各位の御支援を得て一旦發表して見れば一日も早く發行し度いと考へ、望月君と共に奔走した次第です。

何をやるにもまづ金の事を考へなければならず、全豫算を廣告料収入でまかなうというのですから廣告が集るか否かという事が發行出来るか否かを決する鍵でもあつたのです。

四月初旬から廣告勸誘に着手したのですが、訪問した人々の殆んど全部の方々が、此の勸誘に應じて下さるのみならず、慰めの言葉や、激勵の辭さへおしまない、そのおほらかな態度には全く感激を新たにしました次第です。

おかげ様で早くも廣告募集の豫定額に達し、編輯に取かかつたのでありますが、専門に事務を擔當する者がある譯ではないのですから、不備もあり、不行届きも多し事と思ひます。

「居住者名簿」は松村昌信氏に編纂を託し、全氏の骨折で出来たものですが、二丁目荒川遊園内住宅は特殊の扱になつてゐるという關係から、石神徳太郎氏の肝入りで石神榮藏氏を煩わせた次第です。

同人としては町の同情が集つて、兎に角豫定の通り目的が達せられるという事は全く感激にたへない次第

で何らかの形において、この感謝を表はし度いというので協議の結果、バツヂを作製する事に決し「堀船」を象徴する様な圖案をというので入船に堀の字を配する事として上島氏の筆により五月二十二日に出来上つたので、二十五日には福性寺で、入魂祭を田久保先生をわざわざわして執行した。

その目的は、堀船の繁榮と、之をかける人々の幸福を祈願して單なる紀念としての品であるばかりでなく身の護り、家の守りとして前途を祝福して、些か同人等の感謝のまことを表し度いという念願からである事をお察し願へれば幸甚之れにすぎない。

同人の感激と御禮のことは

此の企を發表するや町を擧げて賞讃をいただき、協賛會が結成された事、廣告募集のため訪問してみれば好意と同情とを以て迎へられた事、協議して頂き度い事や御相談願いたい事があつて御會合を願うと萬障くり合せて御出席が願われた事、鈴木君も全能力を擧げて製版、印刷に努力せられた事、等積極的に御援助が願われた事が無事に發行を成遂げしめたもので一同深く感激して居る次第であります。茲に謹んで厚く御禮を申上ると共に、將來共一層の御援助を御願ひ申上る次第であります。

昭和二十七年六月一日

責任者 牧田平次郎

鏡 各 種
ガ ラ ス 一 般
板 ガ ラ ス
ガ ラ ス 食 器

畑中硝子店

畑中孝造

堀船町一ノ一四八(梶原銀座)
電話王子(81)四五一三番

堀船郷土史 奥付

非賣品

昭和二十七年六月五日印刷
昭和二十七年六月八日發行

著 者 田久保周譽

編輯兼發行人 牧田平次郎

印刷人 鈴木晃

東京都北区岩淵町二ノ三二四

東京都北区堀船町一ノ二天「ほりふな」發行所内
發行所 堀船郷土史刊行會

電話王子(81)二八四五番

ツダランプ
ツダ真空管

シャープ・ラジオ

新強力型

ナショナルモーター

各製品特約販賣店
電気工事・ラジオ一式

白鳥電気商會
渡邊喜久三

東京都北区堀船町1~80(梶原銀座通り)
電話 王子 (81) 2 5 5 1 番

ほりふな發行所刊行

